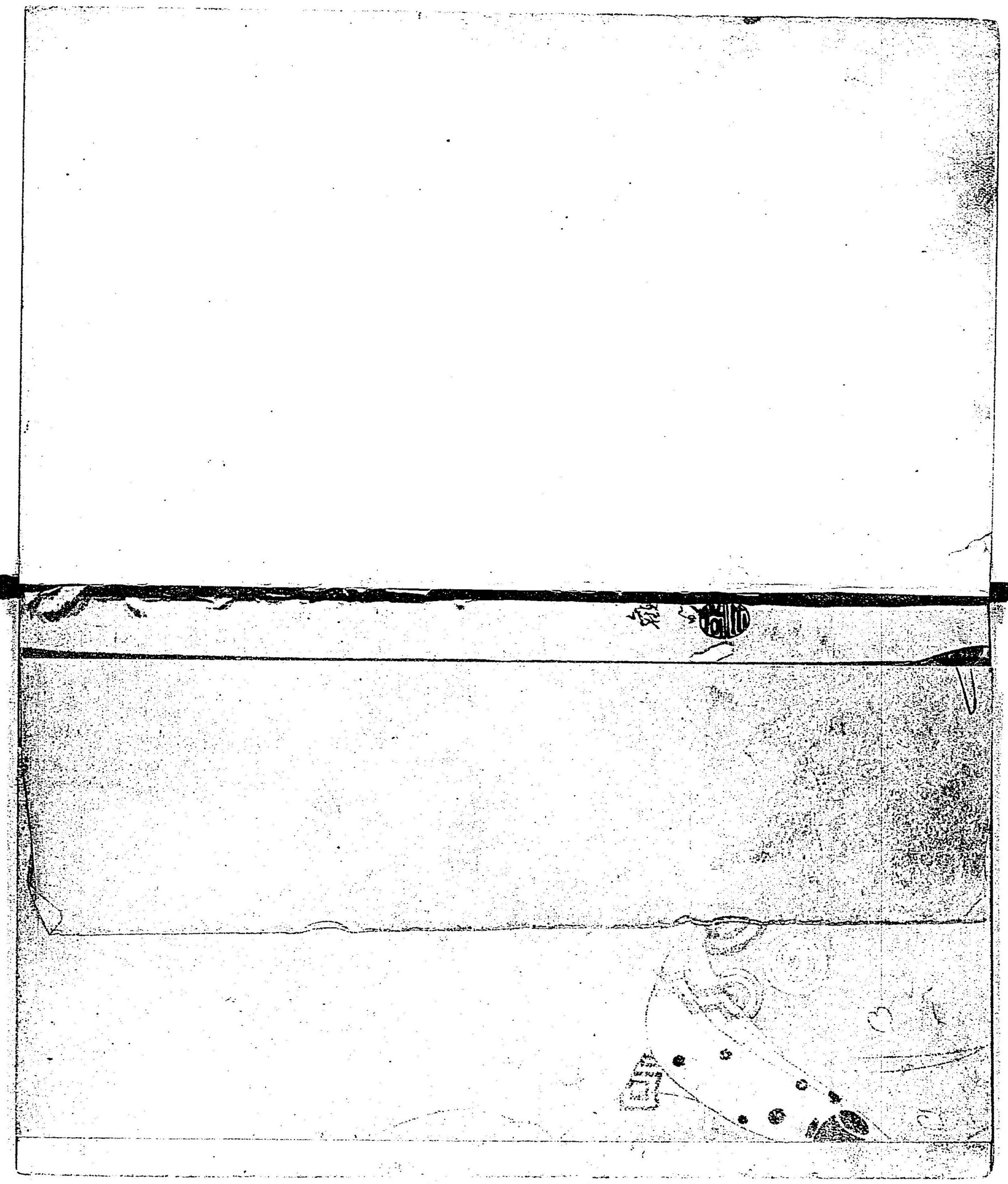
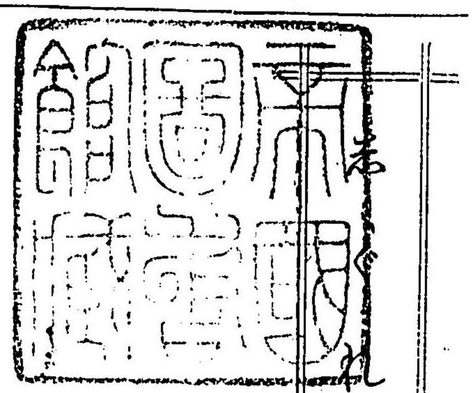
93
185
小說
時代兒
良太郎著





笠

浪六著

一

むかしは殿上人の九重に尊ばれたる右馬といふ名、左馬といふ床しき名さへ殿が伏屋の牛飼ふ童に汚されし元亀天正は見

ぬ世の夢、されば慶長元和の武者權威も禿顱が夜ごとの自慢談話にのみ盡きぬ餘波を留めて、過ぎし島原陣の鎗疵さへも曉の寢覺に物語りつゝ、今こゝに降るは花かや、德川の流れいよ〳〵澄みて礎しかと定まりし三代將軍の全盛、

まことやすの行途も見ねぬ世上に、さてしも判然らぬものは人間の榮枯盛衰、千秋萬歲を祈りし國家安康の鐘の銘より、可惜ら豐家の二代むざと潰れて、聚樂の秋、桃山の春、今は亡た何處に夢の跡をや尋ねむ物の悲哀に引替ゑ、これは又た同じ鐘の銘には自己が名乘を兩斷せられて、いはゞ行末まさに不運なるべき笠の家康が、やがて日本六十餘州を七寸の掌上に弄し、銀燭まばゆき駿府の城中に大御所樣と尊ばれたる身の果は、傳へ聞く二荒山の奥、うづ卷く大谷川の邊、金碧燦爛あらゆる結構を盡したる殿堂のうち、こゝに正一位東照大權現といはひこめられし一代の果報、げに世の中は塞翁の馬とはいへ、そも〳〵運と不運は、いづくの影に潛むものやらむ。

さても人間一代の果報を究めて神となつたる權現樣を祖父に持ち、溫厚篤實さらに一點の微翳だになく、いはゞ玲瓏たんぐ珠玉の如き秀忠を眞實の父親に持ち、しかも今こゝに源氏の長者征夷大將軍の官を襲ぎたる三代の家光、なすべきは

どの戰、闘を祖父にせられて、やるせなき性來の豪放活氣に駈られつゝ、いざや諸代外樣の面々を驚かさむと、世を嗣ぎし日、三つ葉葵の紋どころ、いでこの後の葉茂を見よといはぬばかり、大廣間に外樣をはじめ、諸代の諸侯を招き、くわッと開きし兩眼に見下しながら、やよ面々、我父は言ふに及ばず、祖父は猶更のこと、おの〳〵方と馬の轡を駢べ、鎧の袖を聯ねて、この天下を握りたまひしかど、時なるかな、我は斯く生れながらにして三代の天下を得たるぞよ、いざゝらば今日よりは、今日までの待遇をあらため、明日より以後、ッと予が臣下たるべきぞ、もし異志異存のあらば、更らに遠慮會釋に及ばず、おの〳〵今日より國に歸りて篤と三年の分別を盡したる曉、予が言葉の腑に落ちずば、其時こそは確と覺悟の臍を堅め、勇ましく出陣せよ、家光また矢弓の表に立ち、おの〳〵を迎へむぞと、鄙靈一聲頭上より浴びせかけたる猛勢に、滿座いづれも膽を抜かれて思はず、はッと平伏し、さすが奥羽に羽を延せし伊達の獨眼龍さへ兩刀投出してさらに二心なしとぞ哲ひしかば、十五代三百年の基礎こゝに動がぬ大盤石を据ゑしのみか、わけて御連枝ながら當代には殊更ら眼上の宿痼と忌まれたまひし國松丸の駿河大納言が、過ぎし寛永十年十二月六日、これより句ふべき花の齡の二十八才を露あけがたの夢として、上州高崎なる大信寺に、峯嚴院殿前亞相晴徹曉雲大居士の十四字を後の世の紀念、まれに訪ふ夜半も淋しき松風を、絹ねずも苔の下に聞きつゝ、英魂ながく眠りたまひし後は、花咲き鳥啼きて、誰一人闘東の空を睨み上ぐべき恐ろしのものなく、吹く風は六十餘州の草木を靡けて、千代田の松ヶ枝いつも常盤の色こまやかに、城濠

の蟹さへ鋏を磨がす、　春風春水おもむろに來りて世は安らけき慶安四年の春を迎へぬ、

過ぎし寛永二年、　そよ吹く春風、　腥さ氣もぬけて血に痩せし花は昔時を忍ぶが岡に、　東叡山寛永寺の建立ありし時、　京洛は嵐山なる面影を此處に移さむとて、　櫻花の千株を植ゑ增せし以來、　年ごとの春やむかしの春ならぬ風致、　わけて今年慶安四年は花に無情の風雨さへなかりしかば、　そも〳〵今日を全盛と天晴れ二十四番の千紅萬紫を押退けつゝ、　春の舞臺は乃公のみと咲き揃ふたる花の白雲、　やれ雲か雪か、　さらずば霞の奥かと怪まるゝ上野が岡は、　紅紫の幕に包まれて、　老若男女の人涙一時にドッと押し寄せし廣小路を、　他目うらやましく手を引合ふてゆく男女のもの、　見れば男は歌舞伎に傳ふる水木辰之助そのまゝ、　水も堪らぬ若衆姿、　引添ふて歩む女は絶世の美形、　年も十六夜、　富士額、　後れがちなる足も疲れて、　やゝ小走りの姿しはらしく、　押し合ふ人に酔ふて、　ぽッと紅させし頬のあたり、　憎や風に弄らるゝはつれ毛の態とならぬ風情に、　往來いつれも足をとゞめて見返りつゝ、　春はいざ心も空に浮たちぬ、

其二

戰場の塵を烟りし德川五本骨の金扇に、あふぎいだすや太平の春風、そよ〳〵と人の心を奪ふて、花に恨むか春雨の徒然の窓に唄ふ小歌の一節も、いつしか淋き三河訛をぬけて、浮た調子を弄びつゝ、やう〳〵に華奢風流の嗜好に耽りゆくさま、何事、すは戰場となりし曉、諸山に細き喉咽元いかに張裂くるはど叫べばとて夢にも三軍の號令が成らうぞ、小鼓うち馴らしたるその指先に三尺無反の大刀なむとして電光ものかはと閃くべき、ましてや魂魄こめし伊達の細身は吹かゝる横町の班犬さへ覺束なき其さま、かむばしき芳野の花の武者氣質いつしか失せて、これは又た町人風情に强を挫き弱を扶くる伊達衆の俠骨、みる〳〵八百八町に鳴りひゞいて、花は櫻木と共に大江戸の一名物に唄はれしかば、さすがに負けし

魂の三河根性むら〳〵と一時に沸きいで、やれ鳴神組の、鶴領組のと、我れ劣らじの意氣込、果は燃ゆるがごとき血氣に任せて、我から好む刀の鞘當、袖の摺合せも多少の緣とはならず、結ぶ意恨の血の雨さッと逆るのみか、猛れる鷲の羽風をならして、横に車を押通す我武者の亂暴狼藉に、滿都の人士いづれも畏毛を立てゝ戲標、きつゝ、わけて物見遊山の場所には大の禁物、我から避けて路を讓りぬ、

雲の上野も春といへば、人は雲霞を引く細に、掛つらねたる小袖幕、紅、紫のいろ〳〵、梢の花に照添ふて、げにや衣香扇影、まことに大江戸の花の春なれや、

こゝ清水堂の背後、張廻したる花見幕、うちや床しき武士の主從、主と覺しきは三十有余、目眥裂けてくわッと見つむる眼光人を射り、剃立の髯の跡、青黛もて頤を隈取りたらむが如く、いざといはゞ非を是になして押通すべき面魂、やがて大杯ぐッと呑乾しつゝ、ずッと下坐に扣へたる大の男に指しながら、『や、荒馬、又た眼鏡かな、ざ、老人でもあるまいに、この杯、いざ美事に乾せ』、呼ばれて大の掌に杯おし戴き、『冥加至極、ありがたく頂戴いたしまする』、いひつゝ元來の下戸、早や朱盆のやうに赤うなりたる面を撫でながら、『主君、それは御無理、荒馬奴、かくの銘酊、早やかくの酩酊に御座りまする、此上は平に、平に御免を蒙つて』『はゝゝゝ、元來の下戸と見ゐるな、さらば酒は許しつかはすとして、こりや荒馬、そちが小唄が所望ぢや、やれ傳内、歌はせよ』『さ、關取、主君の御諚ぢや、歌はずば卑怯ものと笑はるゝぞ』、

いよ〳〵ます〳〵當惑の顏色を、武士はいよ〳〵興がりつゝ『いよ〳〵卑怯ものと成り居つたな、さゝ、何としても歌はぬかな』『主君、そ、それは全くの御無体、元來大の不粹もの、全く以て小唄なぞゝは』『いや、隱すに及ばぬ、が、荒馬、なるはど、其やうに萬事に引を取つては、土俵の上で負を取る筈、はて、不憫なものぢや、やれ去年の夏場所に、綾瀬に負けたは眞實、はて、さて、さむ〳〵、見苦しい負けやうぢやつた』いはれて思はず想ひ出せし去年の相撲、『そ、その仰は、主君、無念に御座りまする、勝負は時の運、あの節は全く以て怪我の……綾瀬めに怪我の功名させまして御座りまする、おのれ、やれ、荒馬めも男で御座りまする、いつかは思ふ存

分、土俵の砂を甜めさせでは、と、朝夕、磨利支天に祈つてをりまする』、

折しも暮ちかき春の夕風、張幕の裾を煽つて、ちらと見えたる美人の面影、主人の武士は目敏く夫と見て、衝立ち起りさま、幕をしぼつてじろ〳〵と眺め入りしが、何おもひけむ、大喝一聲『縋けやッ』いひ棄つるや否、幕の外に馳出したる樣、何事ぞと折しも座にありし六人、いづれも一刀左手に取りて立上りぬ、風一陣、花ちら〳〵と舞ひぬ、

すはといふまゝ身を起せども、さらに合点のゆかざる荒馬、馳せいづる主人の袖ひきとめ、『ト、主君、何事で御座りまする、ゆきてよくば、荒馬めが扣へて居りまする、さわ〳〵とお願ぎあつては、さ、御身分のはどにも』いはれて輕く首肯きつゝ、顏さし寄せて呟きながら、はるかに行過る美人の後

姿を指しぬ、『や、主君、あれこそは綾瀬が妹、御聞及びの靜江、男めは綾瀬の念者、調布勘彌でいな』いひつゝ莞爾と笑み傾けて、主人の面体ジッと伺ふ心の一物、武士は俄かに力づきたる風情、『なに、聞及ぶ靜江となる、して一人は綾瀬の念者となる、こりや面白うなつて來たぞ、荒馬、去年の意趣がへしは此處ぞ、油斷すな、縋けッ』、

其三

今を全盛の花の樹陰、おき並べたる床儿には、客足やゝ淋れて夕映の色また一入に照まさる風情に今日の餘波の惜まれて、やう〳〵此處まで迎り來し男女のもの、彼や勝る、花や勝ると、往來の人に指さゝれつゝ、今しも立歸らむとする前途に、立ちふさがりし武士一人、よろ〳〵と千鳥の足元危くも倒れむとして、矢庭に美人が袖を掴みぬ、『やい、無禮ものめ、武士が通行の邪魔するのみか、うぬ、この帽に泥をつけたな』堪忍ならじと息巻あらく罵りつゝ、早や引立てむ不法の振舞男はしづかに進み出でつ、『これは〳〵歴々のお武家樣、これなるは私めの義理の妹、いかな御粗忽をいたしましたかは存じませぬが、心あつての所爲では御座りませぬ、重々無禮の段は、かく申す私、この調布勘彌めが、お詫いたします』聞くより武士は醉荒らげて大喝一聲、『や、何といふ、調布勘

彌とな、さては聞及ぶ綾瀬めが念者よな、それと聞けば猶更ら以て、そも〳〵角前髪の若衆姿で、その口の利きやう何とした事ぞ、この乃公を誰だと思ふ、今大江戸で鬼神も恐るゝ、隙間なく罵りつゝ寶かくる喧嘩の緒口、鶴鴿組の林内記ぞ』勘彌は尚も怒らず、再び大地に頭を下げながら『お腹立は萬、いかやうにも御詫はいたしませうはどに、これなる靜江の疎忽は幾重にも』いひも終らぬ勘彌が右の肩先土足にかけつゝ、武士は一入醉を厲ましぬ『やい、聞く耳持たぬぞ、それ傳内、この女、身が邸に引け、幸ひの新刀ためしくるゝぞ』いふや否、ばら〳〵と木立の陰より顯はれし六人、中に一人荒馬の婆、勘彌見るより、くわッと睨みぬ、『おのれの同類よな、むゝ、推しよする横車、それで仔細は讀まれたわ、

かねて風聞の鶴鶴組に、我物顔なる林内記、おのが曲げし心より、あの荒馬の人でなし奴を近づくると聞きしが、さて今日の難題持ちかけしは、たゞ酒の上の横車、無理強いにする亂暴とのみ思ひしに、さても荒馬まで打揃ふての喧嘩買か、

さらば此まゝ納まるまじ、いざや詫たりとて聞かれぬものと定まりなば、此方も飽まで意地を張らむ、さなりと心の覺悟とくに定めつ、「いざや、敵手に足らぬ蛆虫ども、さア、こいかゝれ」叫ぶや否、花の顔さッと紅を流して、飛びかゝりさま、内記が掴みし手首をもぎて、柳眉をきッと逆立てつゝ太刀の鯉口切て突立ちし様、瀧の上なる制多伽童子が顯はれ出でたるにも似たり、

花が物いふ句ひの太刀先、いさ試みに賞翫せむと、何小癪な

と叫ぶまゝ、さッと左右に分れて、いづれも太刀の鞘を拂へば、いつのまにやら立染ひし人垣さッと壞れて、それ拔いた

と動搖き顧ぐてる、あはや間一髪、血汐の雨の降らむず一刹那、躍り込だる一人の男、白刃の間に立塞がりつゝ、「その喧嘩、おれが買うた、額の小三が引受た」見れば男の花の三十路にちかき天晴れ骨柄、板倉屋源七が餘波の障子髮に、ゆるぎを打たせ、大手を廣げて突立たる面魂、山門の仁王動ける

ならば動いて見よと叫ぶが如し、

當時の慣習、二本差したる武士と見れば、まだ近寄らぬ一町手前の町角に避けたるはぞに恐れしものを、況てや言葉の雨ふる喧嘩の場所、しかも白刃と白刃の間に、飛て入つたる不

敵の男、おのれ僭越の素町人め、小面にくき振舞よと、内記は烈火の如く憤りつゝ、『何とした振舞、したい何者ぞ、分に過ぎたる喧嘩の留立、汝等の出るべき幕でないぞよ』、小三しづかに振返つて身も低う、『これは申おくれまして、私めは、額の小三と申します、けちな野郎で御座ります、御歴々の前に出でゝ仲裁などゝは、分に過た不了簡、さりながら、かく見うけては振棄てられぬ私の天性、狂て此場を私にお任せなすッて』いひいつる言葉は一々入さらに慇懃なるを、何と聞きけむ林内記、『むゝ、額の小三、聞けばどうやら小耳に挟むだ事もある、しかし抜いた刀の手前、武士の意氣地ぢや、はや引かれぬわい』推通した横車に、小三さりとても胸に壓むで顔を和らげ、『さりとは御聞わきなし、何とぞ此場はおとなしう、この私めに』『ねゝ、くどいわッ、そこ退き居れ』、いふ

や否、小三が肩先ぐいと掴みし内記の利腕とつて抑ひ、きッと突立ち大音聲に叫びぬ、『最前より、虫を殺して聞いて居りやァ、牛狂氣の三ピンども、さァ、かうなりやァ、額の小三だ、大威しの其抱刀、斬れるなら斬つて見よッ』

早や是れまでと矢聲も掛けず斬りつくる内記が太刀先、あはや小三眞二つと思ひの外、するり身をかはして飛鳥の如く飛込みさま、早速の拳法、胸板丁とつけば、力込めたる足元ういて、はや二歩三歩、よろ〳〵と顔つかひする際もあらせずやッと排たる切聲、内記はウンと仰反りしを、誰とて踏とゞまりて主の先途を見屆くるものなく、はや夕暮の木下暗、いつしか雲を霞と逃去りぬ、

暗を隈取る花の薄明り、畦の脈ひに引巻の夕月はのめきて、遠けき森の彼方より、擡出すかへて上野の山の夜の靜けさ、

入相の鐘木魂に響きて物さびしく、立てこむる夜の霞は、深く四方を包みて、林の木立おぼろ〳〵、一刷毛の墨絵にも似たらむ此景色に、思はず見入りたる都の小三、されば身に沁む春の夜風に心付きて、悠然と袖うち拂ひ、倒れし内記を後目に見やりつゝ、『はゝゝゝ、さて立派な御震姿、思ふさま夜露の御馳走におあひなされよ、どれお先に』獨言つゝ行かむとする背後、木立の陰より顯はれしは勘彌と靜江、勘彌うやゝしく頭を下げつゝ、『かつて御緣もなき御方に、身に餘りたる情の助力、お禮はきッといたします』、いひつゝ顧みれば、顏の紅葉も夜目には心安しと、逃る言葉もしはらしう、『ワ、妾よりして思はぬ難義、お助けが御座りませねば、どうなる事やら、まこと生命の親の小三様、御恩のほどは身にしみ〳〵、して御身体には別段の御怪我も』小三は氣の毒げ

に、『いや、思つたよりは弱い奴等、蚤の喰つたほどの疵もなし、お禮は返つて痛み入る、はて夜に入つては歸途が氣づかひ、どりや家まで送つて進せう』

其四

一札を以て申進じ、さて昨日、配下の米熟もの、上野山に於て、さん〳〵の馳走に預かり、冥加至極あらため此方より御禮申述べ、就ては折角の馳走に返禮いたさゝるも心外千萬、明夜七刻ごろ、弊宅において心ばかり

の擬應いたし度、萬々一御入來これなき時は、當方より出向申すべくい、以上

船越十左衛門

額の小三殿

殺氣あふるゝばかりなる恐ろしの一札、向島白髭の片はとりの額の小三が宅に飛びぬ、

かゝらむとは豫て覺悟のこと、幾かぬ心も今さら傾むくる頭の炊しさは、我を親とも頼む兒分の行末、船越は音に聞ねゝ鬼旗本、これにつゝく無道の白徒、我から棄つる命ならねど白刃の間に鉄湯の酒宴、意地と意地との張合には、面に血汐を濺がむずる五ひの輿底、我に笑ふて退る胆はあれど、彼が執念く祟らむとの心は懲めたり、我身一つの上ならば、この素首飛ばむまでも、一座の胆玉挫ぎ潰して、こゝ面白う遊む

でくれべきに、こゝに多くの乾兒といふ五分の弱点、意地を撓ても無理に通さする胸惡さ、苦しさ我慢む男の道かや、それも立たずば腰の一口、あてがひ扶持に痩細りたる彼等の素首、腕の限り切落してやらむも一興、この場となつては不用の命、美ゝ事死んで退んに手間暇入らぬこと、どりやこの間に秘藏の一刀、あらためやうか、取出せし一刀、薄暗き行灯かき立てゝ、拔放す中身は二尺、露凝る刀尖灯火に翳して、屹と見詰め、暫時無想の小三、有宇の逆る滿身の英氣、名匠が冴たる腕に刻み上たる像の如く、身動きもせず居たりしが、やがて大刀がらりと投げて、大息ふッと吹かくれば、燈火ゆら〳〵と瞬くも凄まし、

『親分、様子は殘らず、先刻から襖の陰に見て取つた、どうした譯か、それも大方は知つてゐる、こゝな時こそ乾兒どもの役、うち明けて萬事は任しておくゝなせエ、もとより吝な野郎ながら、命を賭たら、ちッたゞ親分の代理も出來やせうナヽト親分、明しちやア呉なさらぬか』、もとより更らに人ありと思ひ掛ねば、はッと驚きし額の小三、『オヽ、汝や不動の三次、いつの間に來た、それに周章た物のいひざま、ものゝ筋目も亂れて、それに打明けろの、代理に立つのと、したい何いふ事だ』、さり氣なくいふ小三の顏、今更らに恨めしげに打ながめ、『きのふ上野の花見から、氣分勝れぬ親分の樣子、

變だと聞き紛せば、鶴鶴組の三ヒンと昨日喧嘩があつたとやら、世間では風聞とり〳〵、敵手は誰だと聞いて見ると、親分とのこと、こりや大事にならねばよいがと、內々心配して聞かう〳〵と思つてゐるうち、夕方來れば、見馴れぬ武士、どうやら見たやうな氣がして、つく〳〵思ひ出せば、博奕部屋で四五度も顏を合した鶴鶴組の奴、はてッと其時思つたが、何の仔細か晩になつたら聞かうと思つて家に歸り、出直して來て見れア、內は寂寞、人氣もなし、留守かと覗ひて見れば親分一人、腕組して物案じの樣子、いよ〳〵胸に掛つて溜らず、そッと忍むで襖の陰、先刻からの擧動は的きりそれと被めたのに、親分今更ら隱し立は水臭ひ、鶴鶴組から招びに來たは底の知れた巧の仕事、親分が直にゆくまでもねエ、私にゆかしておくゝなせエ、決して親分の面を汚すやうな事は』

膝つめ寄せて返辭を待つ、天晴れ義に富む男一疋、うれしき人の誠やと、小三は動く心を靜め、「いや、三次、今にはじぬ手前の眞心しみ〳〵有難い、今となつて隱しはせぬが手前を遣ることだけは決してならぬ、なせといやア、あれ見よ額の小三は、對手が恐ろしさに、乾兒を代理にやつたと世間でいはれては、この小三の顏が立たうか、何も心配には及ばぬど、向ふは多勢の鶴鴿組として、危くなれば逃る分のことそれでは卑怯と向ふで笑へど、この小三の名落にはならぬ、したが此談話は此場きり、みなものにやア洩すなよ、明日は密そりゆきて歸り、世間に知らさず納める了簡、好いか、三次、わかつたか」

其五

おぼろ夜の月影ふけて隣家の槐樹の梢を繞り、垣根に咲ける小米花、これや時ならぬ一團の淡雪、はの白う閨を染めて見わすくも風情あり、夜番の柏子木、門過ぎゆきし跡は、歸厂あはれに室を掠めて啼渡るも、憂ある身には神ぞ辛く、悄然として椽の柱に身を凭せ、思ひわりげに佇む女あり、其人まさぬ獨寢の床淋しく、待身の待遠しさを月に喞つか、さりとては女房めかぬ姿の、どこまでも處女らしさ、さらば

郎の忍ぶ夜の楽しさを、壓算に長々の時を恨むか、更る夜の鐘に曉の近きを果敢なむか、歌麿が香へる筆に寫し出したる浮世美人、こゝに脱出でゝ戀に難むらむ美くしの女性に、露ばかりの物思はする果報は、そもや誰が享くる、あはれ郎の罪深かさ、七生きッて女冥利につきはてむとは、誰が妬みの詈言ぞや、

『今、歸つた』、門に音なう聲は正しく、それと、女いそ〳〵と立迎へて、心細かき手に試むる鉄瓶の湯加減、好しと取下して、すゝむる煎花も愛想なり、『この夜深けに、和女は、まだ寢ずにか、これ靜江、先刻うつたは慌か九ッ、さぞ眠かつたであらう、あゝ、親に別れて親身の兄妹、この乃公ばかりが杖柱とはいへ、日々の世話厄介、苦勞に負けて病ふてくるゝな』、世に嬉しきは親なき後の兄が優しさ、靜江はさすが女の心弱く、はろりと落つる一雫を、輕く笑ひに紛らして『オホヽヽ兄さんとした事が、他人行義の眞面目らしう、妾や、开な事聞たうも御座んせぬ、して兄様、今日親分の御容子は

ニ』、

兄は流石に憂ひの顔色、おしかくさむとすれど、つゝむにあまる胸の思ひ、それと見るより、『どうやら澄まぬ御顔色、我意に蔡る鶴鶴組、もしや無理難題でも』いはれて綾瀬は首うち振り、『ナニ、案じるにも及ぶまい、たとへ理づめでゆかうが先方の負、いさてさいふ事もあるまい』『いゝ、兄さん、妾が女の身ぢやからとて、その隱し立は水臭う御座ンすぞエ、殊に昨日の事といふは、妾の身から起つたこと、親分までが連坐に、憂目を見るを乘おいて、妾や傍觀は出來ませぬ、どうぞ眞實の容子をば、隱さずいふて下さりませ』壓みかけた

る言葉するどく、膝おしすゝめて責問はれ、兄は苦しき胸の中、話しやりなば、常より男勝りの靜江、よも默止てはやむまじ、萬事は我一人と思へども、さて何として無事安穩の工夫あるべき、既に今宵も今宵とて、兄分の衆が涙ながらの留立を、聞入れざりし額の小三、なまなか乃公が差出ては人の情を水泡の搔消すやうにも當らむと、口を塞げどいはれたる妹にまで打明けては男甲斐なき我の顏、いづこに向けむ方もなし、

『兄さん、もう大概は話さずともわかりましたる、この上の隱し立は詮ないこと、たとひ女とて、男の中に育つた姜、女々しいことは致しませぬ、身に叶ふことなら、決して厭ひはしませぬに、な、早う相談かけて下され、女の猿智惠にも亦た宜い分別が御座りまする』、いはれて綾瀨やう〳〵に垂れし

顏を上げながら、『分つた、妹、隱したは乃公の過失、今は殘らず談しもせう、が、また例の勝氣を出して、入らぬ女の差出はせまいぞよ、談話とても別にない、今日鶴鴿組の船越から額の親分に宛てた招きの狀、底の心も大方は押とりてめて討たうの方略、元來まけぬ氣の親分、兄分の不動も乃公も留めは留めたが、思ひ込では聞入れぬ氣性、どうしても明日は行かうと意地を張るに手をつけかね、一旦歸りは歸つたが、敵手は名に負ふ鶴鴿組、いつたが最後、活きて歸さう道理がない』、

はッと太息に埋むる〻兄が顏うち守り、花の美顏に愁を帶びしが、何と思ひけむ、顏ふりあげて、兄さん、さし出ると叱られるかは知りませぬが、好い分別が御座りまする、どうぞ留めずに下さりませ、さういふ事なら親分の代理に、明日は

船越の邸へ参り、三方四方まろく納めて見せませう』『や、お前が』『はい、御案じなさる事はない、留めずにやつて下さ
ませ』

共

六

さし上る朝日影、いさゝむら竹の影を落して、鶯籠の襖に殘ン の香烟ゆるくたな引いて、こんもりと靜けき一間のうち、此夜べのまゝの夢さめやらず、舟聲たかく寢入りし武士や誰、今大江戸に俠骨かむばしき船越十左衛門、げにや慶長元和の

矢呼びも今は疎昔の花と見て、花の蔭も夢にさはらぬ長閑き御世、

する〳〵と疊ざわりも打忍びつゝ、襖ひきあけしは、こゝの用人やらむ半白の老武者、主の轡に着添ふて、幾千の散を草鞋の底にふみにじりけむ、むかし面影は殘る小袖の古疵に餘波をとゞめぬ、『主君、日も高う、お目ざめに、やよ、殿』、二度三度呼び覺せば、やう〳〵に眠れる半眼を開き、『オヽ源吾か、火急の用ばし差起つたか』『ゐゝ、殿、今朝は御寢起の目覺しが御座りまする、御機嫌お直し下されて』『何、目覺しとや、あらば早く見せてくれ』、『や、主君、的てゝ御覽じませ、たゞし源吾申上げまする、その御目覺しの義は生物に御座りまする』、『や、生物となる』、『はい、生物も生物、ずゝと美くしい女性が、願ひの筋ありとて、ぢき〳〵の御目通り願はりた

いと申しまして、前刻より玄關先に」、「はゝゝゝ、爺、その手には乘らぬわい、時に林内記は未だ見ねぬかな」、「ト、殿、冗談で御座りまする、實以て前刻より御玄關に」、「なに、眞實か、はて心得ぬ、の年は幾歳ばかり」、「さ、月ならば十三夜、まづ十七にも御座りませうか、しかも世に稀らしきはどの美くしもの」、「むゝ、男も憚かる身が玄關先に、取次を乞ふ不思議の女、源吾こゝへ召連れい、いやさらに構わぬわ、このまゝ逢ふてつかはすわな」、

門の大手の開閉にも胸を打たれて、表を通る人も此家のみは急走に駈けゆく船越が屋敷、小犬も尾を卷いて恐るゝ玄關先に、これは又た縞麻き女の身一つをもて、案内を乞ふさへ不敵なるに、ぢき〳〵の目通りして願ひの筋ありとは、さても大膽なる女もあつたりけり、いざゝらば我この前に引出せ、

逢ふて仔細を語らば、五尺の野郎かり集めて軍談に夜を更かす小夜の圓座の夫よりも却つて一興と、待つ間はどなく源吾に導かれつゝ、優やかの襖越、手をつかねて俯したる女、嵐に匂ふ花一輪、たゞならぬ香をプンと放ちぬ、

『身共に目通りしたしとは和女か、身が船越十左衛門、して、名は何と申すな』、鋭き聲は肌膚を徹すばかり、女しづかに顔を揭げて驚の初音、『恐れ、恐れ多くも御目通り願ひましたを、かくぢき〳〵の御ゆるし、身にあまりて忝う存じまする、妾、名は靜江と申しまして、綾瀬川兵右衛門が妹、お願ひの筋は類の小三がこと』、『や、何と申す』、

主人は當代不群の猛士、かつて烏羽玉の闇の巷に、わッと喊いて斬かゝりたる、十六本の白刃の影に、笑ふて立ちし船越十左衛門、こゝに思ひ掛なき絶世の美人、露にも堪へぬ花恥

かしの佳人が、鐵板をも扱かむばかりの舌鋒、あまりの不敵さに、あッと呆れてその顏を見つめし折から、又もや言葉は佳人の唇を洩れぬ、『まこと、まこと身の程も辨へぬ、差出の振舞、との御腹立は萬々、空恐ろしう心得居りまする、なれど、この御願ひさへ御叶へ下されたのちは、不穩を働きましたての身、御存分になされても、露さら〳〵御恨みには存じませぬ』、凉しき皆裂けよとばかり、いき〳〵と張つめ、一膝すッと刻み出でぬ、

即けば殊勝の心根、しはらしきに、元來俠氣の十左衛門、やゝ動く心の底、『むゝ、願ひの筋、一應は聞いてつかはす、心を靜めて仔細をいへ』、かねて覺悟の胸、かつは思ひしよりも優しき言葉に、靜江は嬉しく、『ありがたき仰、されば、御言葉に縋りまして、申上げまする一通り、御聞取り下さりませ』

いひつゝ今は臆する色なく、願ひといふは、餘の義にも御座りませぬ、一昨日の上野の花見、それにつけて思はぬ方より御遺恨うけた額の小三が一伍一什なんと御聞きで御座りました、そも〳〵の事の起因は、かく申す妾の粗忽から起りましたこと、額の親分は見かねてのホンの仲裁、果てはあのやうな紛糾となりましたも、皆、敵ならぬ妾より、それゆゑに人樣の憂目を見給ふが辛く、おして御前に御目通りを願ひ、せめて其時の申開きをと存じ、また二つには仔細御聞取の上、小三への御怒すッぱりとお晴し下されたき願ひ』、

さては仔細ぞあらむと十左衛門膝をすゝめ、『オヽ、よくぞ申したる、事に當つては武士道の意氣地あくまで立通さねば置かれぬ事ながら、非理の不法は十左衛門、今まで犯した事はないわ、世上の批評にかゝらぬやうと、日ごろ戒め置いたれ

ど、嘸や組中の若者ども、血氣に慄つて無分別の喧嘩もあらう、さりながら一昨日の喧嘩、是非曲直は知らねども、あまりといへば、拙なき恥辱の取り鹽梅、この胸に据ねかねたぞ』

靜江こゝぞと兩手に滿身の力を籠めて坐を進ませつ、『そ、それにつきて申し上げまする、ことの起りは上野の山に、御聞及びもぞさりませう、兄が念者のかの調布ぞのと花見の茶屋に、暮れゆく日脚を詠めて、今日の餘波を惜むでねましたところへ、どうしたことの間違ひやら、通りすがりの一人の御武家、姿の足に躓いたとやらにて、矢庭に姿の袖を捉へ、やい女め、手討にするぞとの御怒り、調布ぞのも、ともく詫びましたれど、御許しなきところへ、また小陰よりばらく、と四五人の方々、その中には荒馬吉五郎とて、姿兄とは日ごろよりの敵同志、さてはと拠頼ぞのも堪へかねて、すでに大事といふ折から、かの額の親分が見ね、二言三言の果が、親分を捕へてさんくの嘲弄、末には切り合となつて御武家樣が思ひの外の敗亡、まことと、まことと御前の前では憚かりも多う、中にくうは御座りますれど、非理は御武家にあることゝ心得まする、いや左樣とは誰人も存じ居りまするに、なほこの上、小三まで手にかけ給はゝ、世間の批評、もしや御名折の端かと心得まして』、

いさゝ小川の清き流れも石に徹して、さらくと陳べ立てる始、終の仔細、十左衛門おもはず膝と小膝をうちぬ、『や、勇ましき申條、その俠氣に免じて、此方の意地をカラリと捨て、小三が男を立てさせやうわ、武士らしくもない林内記それには少し所存がある』、

懐中の半紙二帖は見てくれにあらず、伊達にはさゝぬ腰の真宗、吹く風に板倉屋源七が餘波の障子襞なぶらせつゝ、花の大江戸に、天晴れ花や、男一代の名物と唄はるゝ額の小三、

月は三日月、花は全盛の上野の山

さるはどにさても其あち、たちまちさッと血の雨ぶらせに、袖すり合はせし遊恨の縁、

むとせしが、待て暫し、名に負ふ鶴鍋組の林とやら、あまりに手痛くせば、事面倒となりやせむ、と思ふまゝ内記の襟首

とるや否、得意の當身、いざや夜露の馳走を賞翫せよと靜かに歸つたるは一昨日の事、昨日は仔細ありげの書狀一通、飛で我手に入りしかば、さてはいよ〳〵額の小三が一期の大事となつたりけり、いざらば驚くにあらず、慌るにあらず、しづ〳〵と定めの時刻を待ちかけたる心の中、あゝこれが乾兒のないものなら、

ことさらに強て稲突く心にあらねど、何とやら面憎きは武士の癖に伊達の詮議、さても我から進むで命の拾場たづぬれども、今に毛筋の疵もなく、可惜ら男こゝに春風に髀肉を嘆したる額の小三、呼べば集まらむ六百の乾兒、三寸の指の向方には百年の壽命喜んで縮め、笑つて水火にも飛込むづ腹心の

もの小百人、その八百八町の乾兒のものに隠れ忍びて、今日は我から投ずる虎の口、臆する心は持たぬ死の一字を一椀の

茶漬さら〳〵と掻込んで、さすがに名殘をしまる〻知合の張三李四、悲前にそれとなく尋ねむと引かくる羽織の襟、かへらぬといふを忌むを、直してくる〻妻もなき身は、今日の門出なか〳〵に心安し、

すご〳〵と見送る不動の三次、鬼とも組まむ平生の荒氣も今朝は殊さら沈みし顏色、美人千行の泣顏よりも心ある人の魂や動かむ、『オ、親分、そんならゆつて來なさい、今になつちやア、云ふこともねエ、存分に、小氣味よく、ね』、見返る小三も、木石ならぬ蟲り蟲、ぐッと呑込む萬斛の涙、『三次、跡を賴むだぞ』、をりしも背戸の牡丹櫻、ばさりと散つて地に落ちたり、

これや冥府の閻魔が廳門、さても萬死に一生おぼつかなき船越の大門、やぶれよと打叩けば、門番の爺が聾耳にも烈しく聞こゆけむ、不時に何人の御入ぞ、今日は何の御沙汰もなきにと、をりしも夕膳の箸投捨てゝ、潜戸細目に外を窺へば、人影なし、さても奇怪、日本六十餘州の大名小名いづれもさゝに怖かる此大戸に、戯れに打叩く生命知らずめ、や、放氣ものもあればあるものと、又もやぐわらりと引開くれば、思ひきや、雲つくばかりの男ぬッと立ちぬ、『これは御門の衆、御苦勞千萬、當家の御招きによつて參上いたせし額の小三、さ、開門の義賴み申す』、

これは又た狂氣の沙汰か、そも〳〵天下の直參、旗下歷の御門前、見れば町奴の分際にて開門呼はり、氣心しれぬ白痴もものかな、『やい、御當家を何と心得居る、江戸中に鳴響いた殿

様に、御面會せうとは一不屈、開門とは奇怪の申條、や、容赦はせぬぞ』棍棒とつて怒鳴り立つれば、小三おもはずカラ〳〵と笑ひぬ、『はゝゝ、これは入らざる詮議、開門すれば汝の役目は濟む、仔細は、御主人ぢき〳〵に申聞ける、さ、開門〳〵』と呼ぶ聲に、立出るかの源吾、小三しづかに進み近づき、『御招きにより參上いたしたる額の小三、御案内たのみ入る』、

おのれやれ無禮の素奴、そて一寸も動くまい、眞二つと刀の反打つかと思ひの外、源吾うや〳〵しく禮を返しぬ、『いやなに額の小三どのとな、これは〳〵能くぞ御入來、主人十左衛

門も待兼て居りまする、すいと通られよ』、さりとては案外小三さらに心の不審晴れねば、もとよりちッとも油斷せず、さては我が油斷の不意を衝て興がらむとの計略か、　扨はともあれ、此場となつて驚するは拙なし、もとより捨てし一命、何となるとも時の運、覺悟の臍を堅めては中々に心つよし、

『町家育ちの我儘もの、武家方の作法は蒼蠅ふて出來ませぬ、萬事御手輕の御案内、無禮の段は平に御容赦』、いざこなたへと導く源吾ふり返つて、『いや、それは御念にも及ばぬこと、氣儘氣隨に任されい』『さらば、御免なりませ』、いひつゝ太刀を片手に後ろに隨へば、源吾はやをら書院にちかき廣間に導きつ、『今をりあしう來客のござつて、事六つかしい談話の最中、ゆる〳〵こゝで御休息下されたし』、いひ捨てゝ立去る源吾が後姿を見送りつゝ、小三おもはず腕を拱きぬ、

さまざまに思ひ廻らせば、怪しきは船越の心底なり、今日の振舞なり、かねて聞及ぶでとき荒氣の武士ならば、かく便々と我を一間にとゞめ置くべき筈もなし、さては來客とは虚僞にて、皆我を待つ同腹の武士が首を鳩めての巧計か、とても餘談に時をうつすことなかるまじきに、たゞ我一人を、さても解しかぬる樣かな、と、頻りに首うち傾けて耳を澄せば、何やらむ聲高く語らふさま、遠く隔てず聞ゆるに、小三ふと頭を擡げ、傍への障子おし開けば、中庭を隔てゝ呉竹を繞らせる奥座敷の小窓に、うつし出す二人の影、さてはいよ〳〵來客、さりながら當の敵を前に扣ねて、いかなる用談、聞及ぶ船越としては案外の悠長と、怪しみつゝ見る中に立上る一人の影、今辭して歸ると覺しく、暫らくして此間の外を疊ざはりも荒々しう玄關の方に立出るけはひ、

客は歸りぬ、いざや我上、狂言の幕は明たりけり、いでさらば如何なる事をしだすやらむと、さすがに心の臍を堅めて待つ間程なく、隔ての襖すッと開いて顯はれしは、かの源吾なりけり、『お客人、さて長らくの退屈、主人案内申せよとのことに御座りまする』、いはるゝまゝに導かれて恐れげもなく進み入る奥の方、一歩は一歩より深く死地にふみ入る額の小三かねて覺悟の上ながら五分の際さへ見せず、眼を前后左右に配りぬ、

襖の隅々、座敷の隅々、油斷なう心を注れゝさらに人のありとも覺ねず、門前通る按摩の笛、遠音さだかに聞ゆるまでの靜けさ、やがて三間ばかり隔てゝ、かすかに洩るゝ燈光一閃源吾立ち留りて襖に手をかけ、するり開いで閾際に伏しぬ、

『主君、御召しに依り、額の小三これまで參上いたして御座

りまする』、

其八

さぞや建廻じたる襖の影には殺氣迸つて、燭光くらき邊には恐ろしの白刃、我を給と待構たると思ひきや、源吾が導きし奥の間、こゝや主人の居室なるべし、見れば、蘭灯に風も靡がす、その火影に端然と坐したる主人の十左衛門、兩刀さへも床間の刀掛に懸れり、小三いまさらに何とやらもの足らぬ心の眼も恥ぢしが、待て

こゝぞ巧みの底の深さよ、さてはいよ〳〵我を陥穽に入れんず計略、卑怯の痩武士、おのれ何はどの事を仕出かし得むやと、ずッと襖の内に入りしが、流石に禮義くづさず兩手を突きぬ、『私めは、額の小三と申す素町人、お招きによつて推參いたしてござります、女房は持たぬ身にも、家には乾兒の奴輩、夜をこめて待ち詫び居らむかと思へば、何とやら可愛ゆうも御座りまする、さて御手料理の馳走の品々、早速頂戴の仕つり、早く歸つて乾兒の奴輩に御志の裾分なりとも喜ばしてやりたう存じまする』我より促がす不敵の言葉、船越は何と聞くらむ、しづかに酔を掛けぬ、『むゝ、乘て聞、及ぶ額の小三か、聞しに勝る天晴れ骨拵ぢや、遠慮は無用、ずんと近う寄つて心置なう、物語つて聞かせ』、うちとけし面色さらに何の懸念もなけれど、小三な

はも心ゆるさず、『生れ卑しき町人の身では、談と申す耳新らしい事も御座りませぬ、それよりも御武家方の、料理鹽梅、さ、一刻も早う賞味仕りたう』『はてさて氣の短かいこと、料理は後の事として、汝が今まで身を入れた伊達の意氣地や左右の物語りも興あらう、まづゆる〳〵と談しやれ』、聞けば聞くほど更らに他意なけれど、疑へる小三が耳には底意ありげに聞こえて、さすがの不敵ものも何と當座の思案もなし、十左衛門、何おもひけむ、床の一刀引よするに、素破やと見る小三が身を構ふる際もなく、拔打に切つくる白刃の稻妻、拔くや早き、避くるや遲き、間一髮、刀は流れて壁を切らむとするを、すッと取直して納め、カラ〳〵と笑ふて坐に直りつゝ、『天晴れ美事、腕といひ、魂といひ、町人には惜し き男、この船越十左衛門、あらためて和睦の引手物に、此一

刀は此まゝ汝に進ずる、納受めて呉りやれ』、さし出す一刀、小三は少し膝をすゝめて、半信半疑の眉を顰め、『ナ、なむと仰せらるゝ、和睦の引手物に賜はるとな、身に賜る面目なれど、まづ其仔細承つての上』『や、仔細と言やるか、汝は靜江と申す女、存じをらうな』『そ、その靜江より起つたる今日の始末、してその靜江が何といたしましたな』、十左衛門輕ろく首背きつゝ、『むゝ、さてはまだ、今日その靜江に逢はぬと見ゆるな、こりや小三、この十左があれまでの意地を棄てゝ呑文遣恨も晴れたといふは、その靜江から始終の容子を聞いてからのこと』『や、何と仰らる、あの靜江が何として』『不思議に思ふも道理、彼奴なかはな、今朝の程、予が少を覺してぎ〳〵に目通りしたいといふ女、實は不審に思ふて逢ふたが靜江ぢや、仔細を問へば

段々と汝等が有様を述べ、身共が非理を詰り居る、即けば道理至極、わけて生命一つを亡きものとして小三、汝を庇ふたる彼女の心底に感じて、その顔も立てつかはし、又た一つには汝が日ごろの侠勇に愛て、身共から手を引いたる譯、今も今とて林内記を、さん〳〵に言ひ懲してやつたも、みな靜江が事の仔細を物語りしよりのこと、かく打ちとくれば、酒の十左衛門、何として怨恨を持たうや、こりや小三、汝も忘れて、いざあらためて一献酌みかはさう』、聞けば嬉しき靜江が眞情、十左が侠氣、小三はッと退さりて首を下げぬ、『思ひがけなき靜江のために御遺恨全く解けましたは、小三これはぞの喜びは御座りませぬ、先刻よりの不禮の段々、平に御免下さりませ』『何として心に懸けやう予はす、つばりと忘れたぞ、まづこの盃、身共より乾さう、やれ源吾

酌して取らせ』

其九

兄様、今朝ばかりはお茶漬にて不承して下さりませ、飯は疾すに往てまゐりまする、と、朝の床はなるゝや否、船越が邸にいそぎし靜江、あはれその談話は如何になりしぞ、待てば待つはぞ心元なき兄の心、やう〳〵と正午ちかき豆腐屋の呼聲四辻に聞ゆるころ、桁子引明る手も、もどかしげに歸り來りし靜江、兄の綾瀬は心も心ならぬ覺束なげの胸といろかして

おもはず突きし頬杖、火鉢の縁を辷りぬ、「兄さん、喜んで下さりませ、願ひの段は屆きまして御座りまする、船越様はお聞入れ下さいました」、綾瀬おもは膝をすゝめ、「な、何といふ、無事で濟だとか、むゝ、妹出來かした、よくも行ってくれた、して話は何と、委細は後として、大抵のところ」、靜江はぬるむ鐵瓶の湯くわと呑干しつゝ、「あの、船越様の御邸で、御目通りを許されやうか、もし、叶はねばどうしやうかと、眞實、淺草の觀世音を念じて居ました、その御蔭か、何のむつかしき事もなう、やすゝと對面も叶ふた嬉しさ、こゝとに兄様、船越様は聞きしとは違ふて、眞實の武士、一昨日の仔細は、かう〳〵と有のまゝを御話し申して、親分の御身の上どうぞ御恨みを晴らして下されといひましたら、な、あの世間で鬼と唄はるゝ人が、ぐッと聞き入つて小膝をポンと叩き

あッ、わかつた、拙者が悪かつた、意趣意恨は更らになし、小三が顔も立てゝ遣はすと、それから、この妾をさん〳〵褒めちぎッてな、天晴れ〳〵とそれは〳〵顔から火の出るやうな御言葉ばかり」、いひつゝ胸なでおろして兄の顔じろ〳〵と見やりぬ、

迚も免れぬ切迫、いはゞ妹の靜江より起りし今回の紛糾、これゆゑ、可惜ら名物、かの親分を殺して、いづくに我身の立つべき、しかも對手が天下の横車、船越十左と聞いては今は早や遁れがたなき生命の瀬戸際、おのれ、やれ、思ふまゝに最後の晴場所さだめむと、觀念の臍を固めて不動の三次もろとも堅く誓ふて歸りし昨日、思ひの色を妹に見られて、今朝は人の身一つを、我から虎穴に投せし哀れさ、とても生ては歸るまじと思ひしに、うれしやかゝる上首尾となりぬ、

『あゝ、それ聞いて安心したわ、はて案じるより産むが易い とはいふものゝ、妹、そなたの手柄を話したら、親分もどんなに嬉しう思はう、どりや、さういふ中にも親分が、もし出だしては皆むだぢと、どうりや頓と氣にかゝる、いざ一走り、親分まで』、

本所横網の我家を出でゝ向島まで一さんに駕を傭ふて、宙を飛ばせし綾瀬川、はや暮れかゝる軒端より、親分うちかと躍り込めば、内には一人悄然と不動の三次が腕組に、留守居の跡の心配顔、それと見るより『親分はまだ家にか、大事の用があつて綾瀬が來た』、いへは三次力なげの辭を絞りて、『オヽ好い所へ綾瀬關、用とは何か知らねェが、親分は最う今朝の中に出てしまふた、お前さんにも呉々も宜しくいつて呉れろッて、しみ〳〵いつて往きなすつた、さうして其用事といふのは』小三が出でしと聞くや否、綾瀬はいとゞ落膽の腰うち下し、『あゝ、はや親分は出なすつたか、折角靜江が苦心も今は水の泡となつてしまつたか、殘念にも、口惜いにも、まア談を聞いてくれ』、諄々と語りいづるは今朝よりの靜江が苦心しみ〳〵聞終つて不動の三次はやるせなき遺憾の齒をかみ鳴らしぬ、『ゐゝ遲かつた、〳〵、とはいへ一旦さう先方が解た事なら、まさか親分が何といはふが、一々腹を立てやしめゐ、綾瀬關、それとも何なら、私と一緒にゆきなすつて、船越の近所を見張てゐて、親分が這入らねェ中、呼びとめたら、一番無事にゆくだらう』、

さらば諸共にと、二人は共に家を立出で、牛込なる船越の邸まで息も吐あゐず、急げば、夕落なれど、流石に人目を避けて一町ばかり、手前に忍び、今か〳〵と待たれども、いかに

しけむ、姿はさらに見ねず、折しも月はあれども朧夜の暗きを幸ひ、邸近くに忍び寄り、窺ひゐるとも知らずして、あはれ何もの、船越家の潜戸より出來りしものあり、それと月の光にすかせば、遺恨かさなる林内記、やれ外道め、畜類め、いけすりめ、何としてくれむ、

窺ふ人のありとも知らねば、林内記は潜戸あらゝかに磐と閉ぢ、門に對ふて屹と睨みし眼光、たゞならねば、いとゞ心元なき二人のものは、互ひに顔を見合せて、言ひ合さねど不動の三次は、行過る内記が跡を忍びやかに跟けゆけば、一町ばかりの町角に、待合したる武士二三人、いづれも密々とさゝ

やきつゝ右と左へ別れゆく体、必定巧みのあること、親分の上心もとなしと、引返して綾瀬に語れば、綾瀬も疑心の首を傾け、薄氷を踏む二人の心、門の扉に身を寄せて、猶も耳をば澄せども、さしても變事のありとも見ねず、

やう〳〵時刻はうつりぬ、何とせしやらむと二人の心さすがに安からぬうち、玄關の方俄かに明るく、ぱッと差す燭光、門の隙間を洩れ來るに、二人ははッと身を引いて聞けば、正しく小三が聲、さては御無事か、やれ嬉しやと撫下す胸に、またさしかゝる疑念の雲は、内記が以前の密談、

なき身を覺悟して入りし冥府の門、おもひきや案外の饗應う

けて、快く飲みたる酒の酔、足元あやふく辭して、門をいづる小三、待ち設けたる綾瀬と三次は矢庭に左右の袂をつかみぬ、『親分、綾瀬ぢや』『三次で御座ゐます、よくまア無事で』情迫つては口も語らぬ二人を眺め、『おゝ、綾瀬に三次か、やう氣づかふて、こゝまで來てくれた、それにしても、綾瀬、男にも出來ぬ靜江が周旋、お蔭で自己の男も立つた、禮はゆる〳〵いふけれど、忝けねエと傳へて呉れ、オヽ夜も深けた、家へ歸つて、ゆる〳〵と飲明かさう』、不動の三次は聲を密めぬ、『オ、親分、内の首尾は兎もかく、歸途は大分劔呑で御座ゐますせ』『や、歸りが』、訝かる耳に口當てつゝ、綾瀬のいふ、『先刻うちから出て來たのは、見覺ゑのある林内記、という不思議と三次が跟をつけて見ると、あれあの角から又た三四人、しきりに耳打してゐたは、必定腹慰せの巧み、氣をゆる

しては一期の不覺、用心に若くはなし』、小三も何か思ひ當つて打うなづき、『卑怯未練の林のこと、今夜は折角の手筈をあの船越殿に破られた意趣返し、何か手出しをするかも知れぬが、奴等の手並はかねて知る、もし飛かゝらば最期、ずゝと土性骨を挫いて呉れう』、いひつゝ綾瀬を前に、三次を背後に、一入さらに心配りて歩みいづれば、折から深くる夜の空霞ふかく沈みかゝる月は覺束なく朧の影を地に落して、道の片側を薄く照し、さすが大江戸の八百八街、水の打ちたるごとく寂と靜まりて、犬の遠吠眠たげに長く聲を引くも、更らに淋しさを添へぬ、

途ある十字の辻、くらき軒下の暗の中より誰が抛ちし礫一つ流星の如く先に立たる綾瀬の肩を掠めて飛びぬ、すはと齊しく思ふ間もなく、相圖と見ゐて、ばら〳〵と走り出たる四五人の曲物、ものをもいはず、この三人に斬りかゝりぬ、かねて心構への小三、さらに動せず、袖をくゞつて走り拔け、矢庭に一人の襟上つかむで投付けつゝ、『暗の不意打とは卑怯の振舞、その鈍刀で男の骨がきれるものか、さ、一人一人は面倒くさし、一度に掛れ、さア來い』、突立たる猛勢に、膽をのがれて逃出しぬ、

座うちはらひ、一町あまり綾瀬と物がたりつゝ來かゝりし小三、フト心づいて顧みれば、南無三、不動の三次が影は見へず、

其十

たゞ假染の遺恨も打解くれば酒の水、さら〳〵と流し棄ては露の名殘を留めず、身分の高下も忘れて一人の友垣得たる心の船越十左衛門、今日は微行に向島の花見がてら、白鼠の片邊に額の小三が花を叩いて氣味よき彼が談話を聞いて孤の酒に香の物、長き一日を興じて臭れむと、供には例の源吾爺たゞ一人召連れて、瓢然と邸の門を立出でぬ、

都鳥ことゝひの團子も可笑しからず、一堤の景色も厭きたり

やゝ傾むけし瓢の底かろく、腦曲にとりし足拍子、花を三圍の社ちかく、かの小三が淀を尋ね來て、源吾に命じて門の戸はと〳〵と叩かすれば、人やあらぬ寂寞として答ふるものなし、さては留守か、折惡しく尋ねしよと流石に殘りをしげの風情、やゝ荒く二回三回うち叩けば、應と答ふる聲も欠伸に消されて、『他人行義に門叩かずと、誰かは知らぬが用があらば遠慮なく入らつせい』、

他ま で無精の言葉、さて興がる奴と、十左しつかに源吾を顧みてうち笑みぬ、『小三は在らぬか、身共ぢや、船越ぢや、花見の歸りにフト思ひついて、わざ〳〵尋ねまぬつたのぢや』小三やをら折戸を開いて請じ入るれば、十左滿面の笑を傾けつゝ、『瓢の酒は乎になつたが、まだ飽たらぬ酔心地、何もいらぬが酒一つ、足下の談話を肴にして傾けたい、見ればたゝ

一人の住居、これでは無理も頼まれまい』『いや、御容易い御用、酒は幸ひ私の飲料が御座りまする、お口には所詮と存じますれど、今さしあげまする』、

小三が勸むる盃、幾度か飲干しつゝ、『常にない元氣のなきは、仔細あつてか、足下にも似合はぬ屈托、さ、まづ春は浮立つものぢや』、いひつゝ指す盃を受けながら、思案に暮れし小三やうく〳〵に膝うちすゝめ、『船越樣、十左樣、貴方を伏骨と見て、この小三、折入つての』、吹まつたる言葉の端、十左も容姿あらためて、『や、頼みといふか、してその仔細は』、それと聞かば火水の中も引かぬ氣の十左が、一膝ゆつて乘出せしに小三は早や力を得たる心地、『頼みといふは餘の義でも御座りませぬ、先日お宅へおしかけまりねし歸途、待合したる五六人の曲者、不意に打てかゝりしに、それと敵手に繰合ふうち、

見失なつたる乾兒の一人、かなしやその行先の星はついても、私が行けば血を見ねば納まらず、そうしては折角、貴方樣の御厚志も仇となる譯、さりとて片腕と頼む乾兒一人を、やみ〳〵見殺すこともならず、小三しみ〳〵當惑の折から、圖らずも御入來、折入つての御願ひは何卒萬事おだやかに濟ますやうの御取計ひ、小三わけて御たのみ申上げまする」「や、思ひしよりも武士らしくなき林の一類、よし〳〵我組の名折れぢや、小三、萬事は呑込むだぞ、十左、刀に掛けても、その乾兒は明日にも送り歸り得させう」、

花盛りの夜は闇と暮れて、一堤の樹影は烟雨模糊のうちに消

ねつゝ、白髯の常夜燈ねむるが如く木立の奥を洩れ、寂寞して亂杭にあたる水の音のみ高し、

背白く闇を染ぬく花の薄明りに、醉歩あやふく辿り來し二人の人影、二つ巴の小提灯は正しく船越の主從、先に歩みし源吾はつと歩をとゞめて、十左衛門を見返りつゝ、「ト、主君お聞きありしか、怪しき一聲、人氣稀なるこの深更に、花見殘りとも思はれませぬ、必ず曲者、いで源吾めが」、早や駈行かむとするを、「こりや、又た差出た振舞、提灯さげて曲者に近づく、うつけが世にあらうか」、

いざ來よといふまゝに提灯ふッと吹消しつゝ、大地に足を盗みて木蔭づたひに一町ばかり、伺ふ人のありとも知らねば、彼方はます〳〵聲を高めぬ、「こりや三次、末期の水は、殺して置て水葬禮、その時しかと飲むが可、さ、念佛の百遍でも

訓して來世は犬にでも生れて來い」、突きつけし白刃の稻妻五更の闇を照して物凄く、やがて消行かむ露の命、もとより奴斗つけて賀はゞ寶らむ俠氣の江戸ッ兒、眼は瞑で自若たる觀念の臍を堅めて何も言はず、さらに默して口なき体に林内記はいと丶近く差より、『こりや三次、その耳、なんの爲ぞかは』といつても腹立たぬか、さらば斯して取らするぞ」、叫ぶや否土足にかけし面上にかッと青痰吐きかけぬ、三次は思はず見開く無念の眼光、「オ丶、口惜いか、殘念か、せめて恨みの一言もいひたいとならば、まだ曉方にも程もある、さッさと吐して埒を明けろ、夜が明くるが死出の山亡者の旅は見苦しいぞ』、飽まで嗟く嘲弄に、三次今はたまらずきッと半膝立てなはし、『やい三一、先刻から默つて聞きさいひたいまゝの惡口雜言、第一この乃公一人を五匹六匹不意にか

丶つて細目にあばせる卑怯の腰拔、よく恥かしくもなう口を叩くぞ、愚圖〳〵せずとも早く殺せ、血が恐くつて刀が當てられぬいのか、灘の銘酒に、活た肴で、肥やしておいたこの身躰ぞ、汝等が痩身とは品が違うわ、さア首なりと胴なりと氣を落ちつけて切つて見ろ』、逆つたる破鐘の舌鋒、内記はくわッと烈火の憤怒、物をもいはず、振上る太刀、あはや香ばしき俠骨、こゝに落花微塵の一刹那、木立の蔭より大喝一聲、『待てッ』、その聲はそれと知らるゝ十左の音聲、そも〳〵天より降りしか、地より湧きしか、さても意外と呆れたる林内記の肩先むづと引つかみて、『いかに内記、この船越が、あれはさまでに戒めたる言葉を、何と聞かれた、小兒に劣る卑怯の振舞組の名を落されたな、いやさ、この十左衛門の面上に泥を塗つた

な、義に勇む一千の配下が手前、かくなつては穏便に済されぬ、十左さッと覺悟が御座る、それなる方々も能くも神妙に卑怯ものに加擔しめされた」、睨みつけつゝ振返つて源吾を呼びぬ、

やがて自ら手を下して三次の縄を解き捨つれば、夢かとばかり、餘りの嬉しさに言葉さへなき三次が背を幾度か撫下して

「聞きしに勝る天晴れ侠骨、はと〳〵感じ入つた、さて予は十左ぢや、組のものゝ無禮は予が顔に免じてゆるしくれい、身躰は痛むか、怪我はなきか、こりや源吾、この若者を小三が家に送りとゝけよ、さて方々には、十左、あらためて申す義が御座る、身が邸までいさ」

其十一

夢なれや、花の白雲、青葉に染る空の色も、碧を流す隅田の流、夏に入江の葦村に風待つ夕暮の屋形船、吹けや川風の涼味を追ふて、あがる簾の際もる燭火、長う川水に影を曳く景色、京洛の鴨川に比べて、江戸にも納涼の名所あり、さりながら、夏を名物の蚊軍に取囲まれて、可惜ら肥ゑたる美事の身躰一貫、痩せて蚊遣の烟に煙ばるも意氣地なし、いざゝらば、みちのくの奥州に隻目の親父が雄圖を吊らひ、夏草や兵

士どもが夢の跡に、去にし矢叫びを松風の聲に忍ぶも一興、留守の萬事を綾瀬と不動に任せて、天地たゝ一閑鷗の氣樂さは、旅路の悲しさを泣て見送る人もなく、夕顔這ひかゝる我家の門、出ては再び顧みもせず、飄然として咲くや山吹、黄金の名所とぞいふ奥州を志しぬ、村やいづく、茫々たる草野の露に臥しては、物語りに聞く安達が原とは此處か、おもしろし黒塚の鬼も出よ、おしひねッてこれを看に賞玩せむと、在吾中將が風流の跡を柴折に、三十一文字は愚かや、わが腰の業物ためし呉れむ殊勝の剛賊は出でざるかと、奥州街道を仙台に取り、行暮れし身を八百の青螺とそいふ松島に遊びて、江戸自慢の鼻を折られ、外ヶ濱風に吹かれて萬里の涼を吸ひ、歸途は常陸に廻りて水戸の城下に着きしは、頃しも八月の初旬、朝夕の風、征衣の袂に寒く、天の戸わたる雁が音に遊子の故郷を忍ぶらむ秋とぞなりぬ、

さすがに天下の副將軍の御膝元、一武を以て立つ士風の凛々しさ、綺羅の小袖、伊達の細身、ぞべら〳〵としたる江戸八萬の旗本が華奢風流にすさむ墮落の狀に刧を沸す小三が眼には さながら床しき人に淵ひし心地、こゝに旅寢の數を重ねて、はや明後日は江戸へと思ふ北夜、せめては今夜名殘に城下を殘りなう見廻らむと立出し途すがら、途みれば、一人の旅人を追とりこめて十四五人、さん〳〵の嘲弄、元來見ては堪らぬ小三、たちまち身を躍らして早速の氣轉、一々手球にとつて捻ぢ伏する勢ひ、この時まで、拳かためて扣ゐたる旅人、笠ぬぎ捨てゝ見上る顏、「やッ三次かッ」

涙の音、松の聲、旅は悲しき三月の行程、月の山越、露の夜道に、さすが心に隱る江戸のこと、敵多き綾瀬の上、調布の上に事なかれかし、三次は健全か、乾兒は無事か、あはれ花の大江戸に事なかれかし、朝夕かげながらに念じつゝ、迫りついたる水戸の城下、三百里の雨風に、沈ひ晒されし旅の衣、江戸に着替ふるに二日三日となりては、帰心さながら矢の如く、これを名殘りの見物と、足を運びし町はづれに、思はず迫ひし不動の三次、まづ五ひの身の上を問ひ問はるゝこと、我顔見るより一大事と叫びたる三次の顔色、南無三、

さては林が一類、又もや願ぎ出せしか、綾瀬の上も心元なし、

三次が留守を棄てゝ長途を駕に飛したるは、いかにしても容易ならぬこと、そも何事の起りしやらむと、さすがに願ぐ胸を靜め、急立つ三次を伴ふて、おのが定めの旅宿の奥に、膝つき合して開けば、さても、さても、花の大江戸の名に障るべき大事、三次が必死の覚を飛ばせしも道理、

『親分、大事といふなア、他でもない、矢張り綾瀬關の身にかゝること、大きくしては江戸八百八町にもかゝる出來事』いひつゝ氣を靜めながら、『今度、將軍家にては高輪御殿の御普請出來上りし御祝ひとして、この八月十五日を晴れとして、御殿の御庭に土俵を築き、將軍みづから御上覧と極つて東の大關は綾瀬關と勿体もない御内諚』聞きもあへず小三は腕を摩りて急込む言葉に力を籠め、『これは、勿体至極もなき綾瀬の冥加、上様御上覧の角力に撰ばれし身の果報、してその對

手は』『西の大關としては、親分、あ、荒馬吉五郎だッ』『ひゝ、荒馬か、さして驚くはどの相手ぢやあるまい』、去年の勝負に手並も知つたる荒馬風情、何の恐るゝ事やあるべきと、事もなげに言放つたる小三が言葉、聞くより三次は口惜しげの腕を扼して、江戸の事を知らねエから、そゝにのんきな言葉も出る、親分、ゝ、その綾瀬關はな』『や、何とした』『御上意のある前から、烈しい瘧病にとつつかれて床に就いたなり、もう二十日ばかり、飯も碌々いけないはどの大病、あの肥太つた太皷腹も、めつきり痩せて、角力の力どころか、今ぢや生命が危ねエくらね』『ひゝゝ』『江戸中の鼠負の衆が、いろいろ心配して呉れても、病氣ばかりには、さすがの關取も勝たれぬので、切齒して口惜しがるに引替ね、敵手の荒馬は、この春中からの遺恨もあり、力量も以前とは打て變つて、今ぢ

やア關西切ッて向ふものもない勢ひ、それやこれやで、綾瀬關は、慾ひ病氣を推して土俵で負恥ぢ掻かうより、全く出ない決心、ともかく小武藏關を代理に出すことに極つたは好が、世間ではいろ〳〵の評を立て、やれ、綾瀬は俄かに怯氣がついた、假病をつかつて遁げたなどゝ言ひ振らす、原因をたゞせば、あの林の一類が、荒馬の尻おしゝて、先頃からの遺恨を晴らす卑怯の流言、にくい口惜いと思つても、肝腎の綾瀬關は日の目も見ねぬ今の大病、虫を殺して我慢をすれば、また此ごろでは、あれはどまでに世話をやいた親分までが』『何とぬかし居る』『あれはど綾瀬に肩を入れた親分が、うんともいはねエ上、姿まで見せねエのは、多分、綾瀬の臆病風に誘はれたに違ひねエと、聞くに聞かれぬ悪口を、蔭で聞てる私等の心中、親分、察してお呉んなせエ』、おもばず無念の拳を

握り、始終を語る三次が顔、おッと見詰めし小三、おもひに餘る大息はッと吐きつゝ、喰ひしばる歯も軋るばかり、やがて何おもひけむ憤然として挑きし腕、解くより早く突立上り

『よ、能く知らした、三次、すぐ早駕を二挺、十五日といへば、まだ後に十日、よし、酒代は一里小判一枚、百里一飛の健脚十人を雇つて來い、急げッ』

其十二

薄くらき上弦の月を浴びつゝ、夜路の露を散しながら、宙を

走る二挺の早駕、ないはうの悪辭いさましく、一里一枚の黄金の音に後を追ひて、急に急ぐや江戸街道、三回駕を換てその翌日の晝下り、大江戸は千住の宿に達しぬ、

小三は勞るゝ興夫厠ましつ、取直す息杖、砂烟ぱッと起て飛ぶが如くに本所横網の綾瀬が宅に乘着きつゝ、つか〳〵と通れば、靜江は見るより思はずも嬉しさ悲しさ、口惜しさの堰くる涙、かくしもあねず、轉ふがごとく走り寄り、『こ、これは何として、額の親分、わ、わたしは口惜しうございます』

さすがに女、日ごろの雄々しさ打てかはりて悄れたる体、そのまゝ奥の病間に入れば、あはれ人間は生身なりけり、昨日までの紅顔はとんど異なる人と見似ふばかり、『綾瀬、まだ呼吸の根あるか、小三が戻つて來た、おい、綾瀬、お主やまだ死なねェのか』、わざと烈しく呼びかくれば、悪寒悪熱往來し

て、昏々として半は正氣を失へる綾瀬川、きッと眼を見開きつゝ、あやふく半身を起し、聲さへ慄ふて、『あ、哥兄か、よ、よく歸つて來て呉れた、今度の話や聞たであらう、が、おれの心の中の無念さ、殘念さ、察してくれるはお前ばかり、病に勝たれぬ腑甲斐なさ、我身で我身が口惜いワ』、枕に鉢とかみつきて、暫時うち伏したる頭を擡げ、涙を含むで見上る綾瀬の顏色、見れば哀れや痩て骨立ち、眼は窪めて昨日の面影見るよしもなきに、小三は屢たゝく顏うち背向けてわざと言葉もとげ〳〵しく、『なに、無念だと、殘念だと、たかの知れたる病氣で、代理を出す意氣地なしが、よく其音が吐けたものだ、今の和主の背中には、江戸八百の街々を背負つて居るとは知らねェのか、そンな弱い根性とも知らずに今までは兄弟の約束まで結んだは、おれが生涯の過失だわ、天

下の力士といふものは、土俵の上を戰場と心得、たとひ土俵で死ぬまでも、壁の上で死ぬよりは少しは男らしぞ、それでもお主や出ねェ氣か、返辭は後で聞く程に、考へた上で、しッかり埒を明るが好い、いふことあれば、これ綾瀬、又た來やうぞ』、

言捨てゝ歸らむとする小三が袖を扣へし都江、その手をついと振拂つて戸口に出れば、綾瀬は以前より死せるが如く、頭を枕に押つけて無言のまゝに聞居たるが、この時、がバと跳ね起きつゝ、襖際まで躍り出で、苦しき聲を振しぼり、『哥兄ヤ、待つてくれ、きッぱりした返答せう』、聞きしか、聞かし、か、小三は待たせし駕に打乘り、縋る都江を押退けつゝ何處ともなくゆく跡を、裾もちらはら追ひゆく都江、この末は何となるらむ、

ぢろりと見送りし綾瀬川、どうとばかりに身を倒し、暫時身動きもせざりしが、何おもひけむ猛然と起上り、よろ〳〵として危き足元、ふみしめつゝ、やう〳〵に庭におり立ち、車井戸に身を寄せて、息もたゆ〳〵汲上る釣瓶の水ざんぶと頭より打あびれば、飛沫もさむき五体の戦慄、ウメとばかりに悶絶して、生死も更らに知れず、一二分の後、

「綾瀬ッ、綾瀬ッ、おれだ、小三だ」、昏々として氣は有邪無邪の間に叫やかるゝ如く覺ねし綾瀬川、「やい、氣を慥かに持て、何これ式にッ、男が」、と、つゝいて呼ぶ聲、ひッしと胸に徹ねて、むら〳〵と湧上る五肉の熱血、おもはず氣付いて眼を見開き、むつくと身を起せば「氣づいたか、綾瀬」

「兄さん」、御氣がつきましたかと取縋る靜江の手を拂ふて、小庭につゝく稽古土俵に躍り上り、堂々と力足ふみならしつゝ、「あ、哥兄、この綾瀬川は未だ死なねェ、先刻の言葉が一々肝に銘じたわ、明日ともいはずに今この場から、命を賭けて、おのれ荒馬めを土俵の砂に埋めて呉れる、やい、野郎ども、締込みを持て來い、もし負けりやう、生きては踏まぬ江戸の土、さ、夕稽古の仕おさめに一揉もむで呉くるわ、誰でもよし、さア懸つた〳〵」叫びながら仁王立に立たる勢ひ、

さらに病後の身とは見ねず、痩せても松の凛たる一節、小三は天を拜して喜びつゝ、「むゝ、それでこそ日本一、氣味の好い綾瀬關、いまの言葉を聞いて、この胸の溜飲も一度に下り た心地、いざ是からは床上の祝を兼ねた水杯いづれが勝つに

も負けるにも、何せ喧嘩の一花咲かせて、命を進取る今度の相撲、こりや面白う成つて來たぞ、今夜は名殘の大酒盛、三次、鶴を廻してくれ」、

部江が涙ながらに物語る仔細を、耳欹てゝ聞入りし綾瀬、さては我が爲に、不動の三次がはる〳〵駕を飛ばして小三を水戸に尋ね、しかも晝夜兼行、夢も碌々結ばれぬ早駕の、けふ此ごろの心遣ひ、聞くにつけても重きは我荷、八百八町の人々が希望は掛る我身の上、病みて覺束なき我が此痩腕にも、なはかつ廻る血汐あり、いかで負を取ることなるべきか、願ふは摩利支天神、取縛る腕に力瘤入りて、魂ふら〳〵と飛ぶ

土俵の上、

其十三

須彌の四天を象る四本柱、土俵の二十八宿に天地の精氣をあつめて、こゝ阿吽の呼吸に更らに卯の毛の邪念も留めず、勝つも負くるも一代の晴業、武士ならば戰場の氏神なるべき呼出奴が呼上ぐる名は次第に進みて、はや西へかゝる夕日頃、米曾有の見物、今日取組の花なる、東は武藏の國の住人綾瀬川兵右衛門、西は肥後の國の住人荒馬吉五郎と高らかに呼上

る聲に連れて、東西より士俠に上る兩人の力士、並居る人の腕を摺合ふ音さや〳〵と、握る拳も汗ばむばかり、時の行司吉田專左、大紋烏帽子おごそかに立ち上りつゝ須彌の軍配に眞紅の紐を揃へて左手に握り、右足を引いて小腰をかゞめ、ぢッと息をば窺ふ、やがて呼吸を計つて專左、左手の軍扇さッと風を起して、やッと一聲引くや否、突立ち上る此方は綾瀬彼方は荒馬、綾瀬は此ごろの病ひに痩衰へて色蒼白く、しかも元來雪の肌の小男、さて荒馬は拔群の大兵、色眞ッ黒に丹緒を欺き、鬼をも挫がむず兩の腕には鼎を扛ぐる力あり〳〵と見ゆ、げにや苦むす巖の傍に、花薔薇の一輪、見るものいづれも堅唾を呑むで、哀れ綾瀬、微塵とならむ、不憫やと叫びぬ、

いかに心は勇むとも、綾瀬は哀れ病後の身、弛む力に、つと

突入りし荒馬、猿臂を伸して、綾瀬を引掴むや否、ユイヤッと宛ながら小兒を襟首もて引上るが如く、高々と輕く差上し刹那、額の小三はくッと一膝乘出して、ところ憚からぬ大音聲、「あ、綾瀬ッ」、

綾瀬風負の運命は早や究つたり、すはやこの勝負、早や荒馬のもの、したりや〳〵とどよめく間一髮、矢聲をかけて拋げつくれば、あはや綾瀬、生命は風前の燈火、たゞこの一瞬と思ひの外、劍法にては巖流の燕返し、燕子柳に點ずる早速の早業、ひらりと空中に翻りて、落ちかゝりさま、荒馬が左方の肋骨、はッたと蹴付けて、すッくとばかり土俠の眞中央に突立てば、軍配は東に上りて、生死は如何に、ばたりと地響たてゝ荒馬の五躰、屏風の如く倒れぬ、

『よくぞ、あゝ、よくぞ勝てくれしぞ、摩利支天の擁護』、と涙ながらに綾瀬の背を撫でつゝ小三の喜悦、『これといふも全く以て、哥兄の力添、あの刹那に綾瀬と呼ばれたる一群が殆んど神の御群、あゝ、思ひ出しても夢のやうな』、いひつゝ小三が手を取りて、はら〳〵と泣きぬ。[illegible]名殘を響く櫓太鼓の、勇ましき夕暮の空、西にはきら〳〵と宵の明星輝きたり、

つもる憂も日本晴の今日、本所横網なる綾瀬の宅には、折しもさし入る涼月を盃に浮べて、快飲の坐に連なるは、客なる額の小三と不動の三次、主人は綾瀬これた妹の静江、中垣すゑぬ隔てなき團欒に、打とけては興も進む静江が小唄、武骨の一座に得ならぬ一節の花咲かせて、互ひのさゝめき他目も憚たのしげなり、

綾瀬は愛嬌の片笑みつくりて、盃を三次に差せば、酌は差語め静江の役、『三次さん、大分に溜りました、一つ干して額の親分に』、三次はホヽと軽く笑ひて、注ぐ酒の半を乾して下に置き、様子ありげに、つく〳〵と小三が顔を打ながめ、『親分人間の身はどうなるか知れねエもの、もう殺される事と諦めた、この身体が、かゝる嬉しい席にかゝる馳走に合はうとは、全く命冥加、それも思へば皆様方の御蔭、

これからは申すまでもねェが、相互に親類交際してエもンだ、それについて親分も、綾瀬關も、私が一つの相談に乗つちゃア下さるめェか」、組みし胡坐を組直したる不動の三次が、いつになき眞面目の顔付、小三しつかに點頂て、「いふまでもねェ、一旦かくなりし上は親類も同樣、して手前が相談は、一つ体どんな話だ、遠慮は入らぬ、いつて見ねェ」、綾瀬も膝を進めつゝ、「額親分の御心づくし、それを思へば假令この身は粉になろうとも、出來ることならば」、やさしき靜江も、「ほンに何いふ相談かは存じませぬが、親分の御身の爲なら、何なりとも厭はぬ妻等兄妹、いふて見て下さんせ」、三次も今は何とやらいひ淀みながら、「さう改めて聞かれては、私も何だかいひ出しにくひが、相談とは他でもねェ、親分は丁度獨身もの、いつれは姐御を貰はにやァならぬ、それには他を捜すより、幸ひ綾瀬關の妹御なら、前方からの緣もあり、氣性も立派な男勝り、姐御と立ても恥かしくねェ、なんと綾瀬關、承知してお呉なせェ」、綾瀬は小膝叩いて、「その事ならば、この身から願つても、親分さへ異存なくば、して妹、北方も否はあるまい」、いはれて流石勝氣の靜江も、恥かしさに顏うちそむけ、さすや薄紅の頰を袖に包みし風情、「や親分、御前の返辭一つ、早う決めて下せェ」、

月を踰ての黃道吉日、船越十左衞門が身分を忘れての媒介役に結むだる緣の糸、額の小三が白鷺の茅屋に、ふさはしか

らぬ一輪の花咲きぬ、獨り寢の床に聞きわびし隅田の櫓聲、曉の寢覺、これよりは淋しからず、なげやりの竈所に竈の烟煤ばらす、味噌漉に蜘蛛の巣も張らずなりぬ、

其十四

數度の戰場に携へて、萬人の血に染みし鎗も、鞘に納まる御代の、夜は門もる犬の夢も安かるべき此ごろに、さても奇怪や、夜毎の辻斬、昨夜は芝、今宵は四つ谷、さて明日の夜は京橋と、一夜數ケ所に起る注進、區々にして時の町奉行は、

人を八方に出し、惡魔の所在を探れども、風の如く消ゆるに早く、なほ頻々として絶えざるに、評判は江戸の八百八街に行渡りて、誰とて震ひ恐れざるものなく、夜は一町の四ツ角に寢酒買いにゆくさへ憚かりて、宵寢の門ふかく鎖し、さすがの花の大江戸も、夜の靜けさは宛ながら火の消えたるごとし、

城中の噂さも此頃はこの物がたりに持切るばかりにて、捕者は昨夜友の家に酒に更かしての歸るさ、立顯はれし仁王の如き大男、切りつけたる白刃の光、目早く認めて體を開き、渡り合ひしが手練の太刀先、さしもの曲者敵しかねて、卑怯にも逃去りしが、跡に落せし紙片には鵜鴉組の名を記しあり、と一人が自慢ばなしに、又もや一人、捕者は此程の夜、怪し き曲者に出遇ひしが、曲者はいづれも白刃を拔持ちたる四五

人の群、我が立聞くともしらずして、お頭領の船越殿もう來さうなもの、手強き敵に出合ふては、十左殿の御入來なくば心細しと、ひそ〳〵話し、いざ驚かしやらむと、拙者は不意に小陰より躍出せしに、ぱッと立つたる村千鳥、そのまゝ消ねて行衛は雲霞となつたるは、思ひの外の弱い奴、さて此ての辻切は、いよ〳〵鵜鴒組の所業でござるかなと、語り合ふ殿中の噂、いつしか時の挑政松平伊豆守信綱が耳に入りぬ、『はて心得ぬ、船越の風聞、義あり勇ある天晴れ武士の摸範と思ひしに、辻斬などゝは更らに聞へず、もしや風説か眞實ならば、容易ならざる次第、さりながら天下のため惜むにあまりあれど、花の一枝、むざと散らさねばならぬことか』、

既に其夜も更けて九刻頃、伊豆守は心利きたる下郎一人を從へて、わざと人通りなき淋しき道を撰び、牛込御門にかゝりし時、先立つ下郎を呼とめつゝ、『こりや、これなる捉灯の火を消せ』、就かる下郎は、主命やむなく捉灯ふッと吹消せば綾なき闇に咫尺もわかず、さぐるがごとくゆく片陰より、閃めく電光、さしッたりと身をかはせば、力あまりて二あし三足よろめき出づる一人の曲者、伊豆は曲者が襟首つかむでぐッと引付け、『こりや、曲もの、何奴なれば、理不盡にも暗の不意打、憎くき奴めが、こりや灯を持てい』、驚きさわぐ下郎はやう〳〵に火を點し、それと曲者の顏にさしつくれば、伊豆

守つく〳〵曲者の顔うち眺め、小首を傾けつゝ思案の体、『こりや曲者、面を上げい、仔細を明かさば、生命は助けくるゝぞ、姓名は何と申すぞ、包み隠すにおいては、伊豆守ぞ、容赦はせぬぞ』、

『や、拙者奴は、船越十左衛門が家のもの、主人の吩咐にて夜ごと新刀の試し斬に慮外を働いても、さらに悪意は毛頭も御座りませぬ、無礼の段は平に御宥恕、あはれ何卒、生命ばかりは』　伊豆の守うち首肯きつゝ、『はて、船越の家來と申すか、さらばこの伊豆の守を存じ居る筈、いかに主人の申付とはいへ、いはれなく人をあやむるは言語同断、狂氣の沙汰、ゆるし難き奴なれど、いさゝか仔細もあれば、今宵のみは免しつかはす、しかと主人にも申し聞けい、して汝の姓名は何と申すぞ』

『ありがたき御諚、これは伊豆守様とも存せず、聞とは申せ、

恐ろしき慮外、何卒主人だけは穏便の御計策、偏に願ひあげまする』『いや、伊豆守、すてし所存もあれば、追つて沙汰すると、十左衛門に傳へよ』、

今宵ばかりは許しつかはす、以後きッと慎しみ居らうとしみ〳〵いひ残して、立去りし伊豆の後影、此方は仕すましたりと四方を眺め、やがて吹鳴らす呼子の笛、ピーと市街の闇を破りぬ、

此處かしこより立顯はるゝ黒装束五六人、かの曲者は進み寄りて一人の耳に囁きぬ、『殿、今宵は怪我の功名に、勿怪の幸ひ、恐ろしの智恵伊豆とも知らで切りかけ、まんまと生擒られたる不覺、さりながら名を聞かれたを幸ひ、船越の家來と名乗りしが、何と思ふてか、今宵ばかりは免しやるとて』『むゝ、出來した、さては此方の計策、天晴れ成就、船越が自滅

もまたゝく間、前祝ひちや、はゝゝゝと」いふ聲は正しく内記、かの林内記、

其十五

獄の斗つけてまで賣らむと投出せし生命一つ、幸ひに蚤の喰ひしはどの疵なく、いたづらに送る幾春秋、額の小三とも呼ばるゝものが、喰ふて寢て安閑なる生涯おもしろうもなし、さても其のち去る程に、目覺ましき働きもなさねば、惜しや美事の身体におもはぬ疲を見たり、腹こなしの一働らき頼まう

といふ人間らしき奴は出でこぬかと、腕を撫つて喞つ愚痴はいつも靜江がホヽと笑ひに消されて、又しても我夫さんの酔狂な、以前は兎も角、今はお前ばかりの身体では御座んせぬぞエ、聞きたうもなき愚痴を置かんせと、いつのまにやら覺ねてみし言葉の端、いつしか女房めきて、これには流石の小三も一言さらになし、

花の嵐も避けてや吹くらむ、穏やかなる春と秋とを送り迎ふること、三度、いつしか四度、さるはどに彼の林内記は何とせし、さらに姿も見せず、影を潜めて、あれはどの意趣ようも堪へて、これまでも手出しせずに過せしよ、やれ意氣地のなき奴と小三が時に取つて罵る事もあれば、それが結句の仕合せでと、安心の胸なでおろす靜江、三次は親分大事と眼をくばつて八百八街に油斷なく、さても無事太平の此ごろ、わ

はれ殆んど波風たゝぬこの後に、いつまた渦巻く波のたつ事やら心もとなき行末かな、

今日も徒然の一日、やう〳〵暮れちかき冬の日脚、西の様を辷りて消ねゆくまゝに、底冷する寒さは筑波おろしと共に誘ひ來て、白帯の森に噪がしき夕鴉、聲も淋しき門口を、差のぞく中間休の一人、『額の親分は此方で御座いますか』『はい、こゝは小三の宅、して何方から』、立出つる静江の顔うち見やりて、『拙者は牛込の船越から參りました、この書面は火急の御用とやら、返詞は要らぬ、親方と同道して』、

何かは知らず、火急の用事とは心懸り、しかも外ならぬ船越様よりの御迎へ、願ふは無事であれかしと、女心、わけて何事にも心つかはるゝ伊達衆の女房、吉凶さらに知れねば、さすがに氣づかはしげの眉を顰めて、夫人の前に差出しぬ、

『これは、唯今、牛込の船越様から、仲間衆が見えて、何か火急の御用とやら』、

夕方の詫しさを退屈のごろ寢、死破と起きて書面取り上げ、封切ッてさッと一通り読終るや、寄する眉根の八の字、見れば案じらるゝ静江が胸、主人の傍に招寄りつゝ、『もし、どうやら、むつかしい顔附、はて氣がゝりな、して用事の仔細は』いはても聞ねぬ胸に拱く腕、やがては事もなげに笑顔つくりて、『いや、何ぢや、案じるにも及ぶまい、久々の無沙汰に逢ふて談話のしたいとな、先様からの御催促ぢや、鳥渡出てくるはどに、衣類を出してくりやれ、長話しの興づいて、夜は遅ふなるとも知れぬ、案じる事ぢやないわ、迚ふも戻つて來るはどに、留守たのむだぞ』、

いはれては問ひ詰むる汐なく、やゝ案じらるゝ女房氣質、し

ふ〳〵起つて取出す外套、小三しづかに着終りて、『それでは往つてくるぞよ、淋しうとも、今に三次が來やう、遅ふても跡たのむぞ』、立出つる表口、『いや、迎への衆、いかい待遠でござつた』、夜風身に泌む薄暗の空の何方か、また鎖まらぬ夕鴉の願ぎ、けたゝましう鳴き立てぬ、小三おもはず、吃と空うち仰いで舌鼓一つ、『ゐゝ、縁起でもねエ』

丸絹灯の影しめやかに四邊を照して、膝つき合す主客の物語りの外は、雨戸にふるゝ木枯の風、夜氣森々として座に迫る物さむさ、主人は密と吃きして極く膝をゆるがせ、『小三、段

段の異見のはゞ、予が何として悪う聞うぞ、したが、かく成りゆくも時世ぢや、返す〳〵も残念なは、林ごとき豎子に寃られた手落ぢや、自躰、近ごろの彼が振舞、合點ゆかずと思ふたが、よも箇程の計謀せうとは思はなンだ、口惜しいは、山、山ぢやが、何事も諦め一つ、後は何分、頼むは足下一人ぢや、犬死の上、石碑に泥を塗られては、魂魄さらに浮ぶ瀬がないぞよ』、さすがに涙は滴さねど、身にしみ〴〵と沁み入るうるみ聲、小三は拳かためて無言に差俯むく、稍ありて顔を擧げ、決心の色見ゆるばかり、言葉凛々しく、『いや御前、てればかりは拙者の、何としても御言葉に從がはれませぬ、繋がる事の起因から見ても、みな是れ拙者が掛り合ひ、一時の御迷惑かけたのでさへ、あゝ濟まぬと存じたに、それからお身の大事と、お成りなされたとあつては、どうして傍觀が

出來ませう、それこそ男の顔の潰れ時で御座りまする、何と仰せても、その御谷めは小三か身に引うけ、せめては日ごろの御恩願に報ねやうなら、たとひこの身躰は八つ裂にせらるゝとも日本晴の好い心持、指を嘲へて傍で見てゐよとの御諚あまりに胴慾で御座ります、あはれ、何としても、此義は是非に御任せの願ひまする」、

動かしがたき殊勝の決心、聞く十左は眼をしばたゝいて暫かに手もて押とゞむる如く、『はゝ、いつもながら潔きその言葉うれしう思ふぞよ、さりながら小三、よう思ふても見い此度のお谷め、おもへば我に落度のなきにあらず、よしや、それは何れにせよ、伊豆守より怨々の申聞けもあつたぢや、存意も殘るところなく伊豆どのゝ耳には入れ置いた、今は思殘すところなく、たゞ台命を待つばかりぢや、が、小三、見るも

なか〳〵苦々しい近ごろの士風の墮弱、それには好い見せしめ、我が切腹は、武士への手本、美事に腹かつ裂いて世の眠りを覺しくれうと、既に覺悟を究めた今となつて、武士の意地、今更らお上からお助け下さるとも、何として便々と生延びらるゝものか、小三、其方にも似合はぬ、それまでの考へが、よもつかぬことはあるまいに』、

其十六

十左、なほも言葉を續けていふ、『余はこれまでの一生、さり

ながら、一旦の情誼より、汝が追腹切らうとは、猶更ら以て無念の犬死、さては林を何とする、長らふべき汝が生命を長らへて、我亡きあとの無念を晴しくるゝが生々の喜悦ぢやぞ、なまなか足下が差出は、結句世間の物笑ひ、この我まで死場を失ふ恥辱となる、死ぬ時に死なねば、死に勝る恥あると、世の言葉にもあるぞよ」、

諭すが如く、諄々と陳る言葉に、小三いよ〳〵感激の辭をしぼりぬ、「ぢやと申して、小三、このまゝに引込めと仰せられても、引込みて居らるゝものと思召すか、慮外ながら、そも〳〵上の御咎めが、第一、腑に落ちぬ御沙汰、あまりと申せば御無体かと存じまする、成程伊豆様は一代の智恵者、一應は御穏便のお取做を、小三め、御願ひ申せば、御聞屈け下さる事と存じまする」、飽まで身命を賭しても救はむとする世にも嬉しき小三の心、つく〳〵物の悲哀なれど、十左わざと辭あらゝげぬ、「はて、さて聞分けなし、かくまで事を分けて申すに、その耳には入らぬと見ゆる、今宵わざ〳〵呼寄せてまで、打明し話をいたすに、まだ兎やかう我言葉を遮るとは、いひ甲斐なき愚かしさ、もう此上は何事もいひはせぬ、何とでも勝手にいたせ、我は又た昔時のまゝの小三とは思はぬぞよ」、

きッと諭されては、小三早やいひ出づる言葉なく、たゞ涙を存で俯したるまゝの首も擡げず、十左しづかに見やりて辭和らげつゝ、「こりや、小三、今生の別れぢや、快う酌むして歸りやれ、源吾、用意は好きか」、

徳川の初代に花をかざりし神祇組、鶴鴿組、伊達の兩刀犬追ふ威しともならぬ弱武士の中に、いさゝか武士の面目を發揮せむと力めたりしが、果は徒らに町人をして膽冷さしめしのみの事となり、その名を編る猪武士が猥藉の振舞、士人の眉を顰ましめて、ついに公義の廳に達し、船越十左衛門、外二三の頭領、いづれも犠牲となつて死を賜はりし悲哀さを、獨り小陰に笑みを含むで、滿足の膝をたゝき、わが願望成りぬと祝宴の宴を開きしものあり、腐死して梟羽を延す時の運につれて林内記と人に知られぬ、

船越十左衛門が三千の乾兒に代り、潔ぎよふも罪を受けたるまゝ、特別の思召を以て明日は切腹といふ、その前夜の事なりけり、閉門の青竹きびしき中を潛りて、不淨口より人目を忍ぶ一人の男出でぬ、内より送り出せしは潛めく聲、「小三もうさらばぢや、深夜の事といひ、途中は物騒、氣を注けてまゐれ」、名殘をしげの聲音は、紛ふ方なき船越十左衛門、小三こらへに堪ねし血の涙、湧くが如くに堰きいづるを、ぢッと押へて恭々しう大地に兩手を突き、「身に餘つたるお情けの段段、小三、申上る言葉も御座りませぬ、先程よりの御論しは能く腹に入りましてござりまする、もう此上は何で違背の仕

まつるべき、たゞ御亡き跡の憂憤晴して、必らず務めるでご
ざりませう、香華に代へて御墓前に手向くるもの、草葉の陰
に篤と御覽下さりませ、あゝ、あさくも浮世とは申せ、いは
ゞ數ならぬ私から、さま〳〵の御難義引起した上、果が此度
の御生害、御身代りに立つこともならぬ私の生命の棄てどこ
ろ、生きて居る甲斐が御座りませうや、御推察のくださりま
せ』、

涙に咽る聲を搾つて、肺腑より出る小三が述懷、内なる十左
衛門、鐵石ならぬ、これも斷腸の思ひ、やゝありて言葉をあ
らため、『や、小三、早や何も申すな、これといふも前世に定
まる緣、その天晴れの俠骨、安く寃るなよ、死場處を能う選
べ、余が手本おやに、ゆめ輕々しい擧動に出で、我が折角の
心盡しを無益にいたすなよ、好いか名殘は盡きぬ、人目にか

くらば一大事、早う行けッ』、

温言かくの如き、人を、何すれぞ、世は鬼の船越とは呼ぶぞ、
小三は大地に俯臥て思はずはら〳〵と血の涙、しづかに閉る
潛戸の音に、はッとばかり躍り出で、『さ、さらばでござりま
する』、その潛戸は閉て切られても、なほ其人は立つくすか、
なつかしき呟ぶきの聲、小三は衣の塵うち拂ひ、すご〳〵と
起上りしが、足は怪しく地に吸付いて去りがたき別れの境、
げにや塀一重がこの世を限る冥府の關、

さしも大江戸に聳きし鶴鴿組の頭領、船越十左衛門と歌はれしも、今は一基の碑と化して、さすがに香華は絶ねせされど哀れは夕暮の木枯、落葉さそふ墓前の淋しさは、誰か今昔の感に堪ゆべき、盛名は朝日に向ふ霜と消ねて、崩るゝ鶴鴿組の末路、その流れを潤す林内記が雷神組のみ世を思ふがまゝに振舞ひて、潜横いたらざるなきも、何とせしやらむ、これを挫がねばならぬ額の小三が、今は世を忘れたるものゝごとく、白髯の記住居に引籠りて、世間には顔も出さず、何事ぞや今を盛りの四十男が、佛の前に珠数ひねくりて、殊勝らしき経の聲、時雨の窓を洩れて、鉦の音月の夕に響くを聞けば、誰かその心根の底、酌みて泣かざる人やある、

今日も朝がけに船越が墓詣でして、帰りてよりも佛三昧、時は正月の七草も明日といふ六日なるに、毎時とは遊び、世間なみの祝ひは祝ひつゝ、乾児衆の前もあるに、酒など飲むで陽氣にさんせと、妻の静江が諫めも耳にかけず、さても一度無常に誘はれし額の小三、死灰二たび燃ゆる勢ひも失せたるかと、不動の三次も呆るゝばかり、夜に入りては猶さら陰氣くさき一室に、灯火の火影に背きて、つくねんたる小三、心からか疲見ゆる影法師、つく〳〵眺めて静江も同じ嘆きの大息、聞ねてか小三、やをら後ろに向かへりて、常になく言葉も吹まりぬ、『奴どもは、まだ帰つて來ねェと見ねるナ』、

『はい、先刻まで三四人見ねてゞざんしたが、どこへかゆきしやら、何をいふにも正月の事、北廓へでも繰込だのでざんせう』『むゝ、さうなやろ、時になら、元日早々、綾瀬の兄貴から年始を受けたが、俺は何分出懸るのが大儀ぢや、知つ

ての通りの出不精、別に何とも思ふてはゐまいなれど、それでは餘り義理が悪い、丁度今夜は閑暇ではあるし、お前代理に行てきてくれ、歸りが氣遣はれるなら、一晩泊つたつて宜いわさ』、近ごろになき機嫌よさ、妻はいそ〳〵、『何のいな、兄さんのところなんぞ、年始にいくはいらぬ義理、殊に用が多い最中に行けば、却つて兄さんに叱られるわいなァその樣な氣をつかはずに、ちと氣ばらしに、酒なと飲で浮れさんせ』いふを打消しつゝ『いやさうぢやない、義理は義理ぢや、それに久々の骨休め、明日は兄貴を强請つて、芝居でも見にゆつたが好い、留守は野郎共もゐるから、案じる事はないわさ、いや、それぱかりでない、綾瀬には少し用事もあるのぢや、委細は手紙に書てやる、それを持て、鳥渡往てきてくれ』『用があるなら、一走り行て來ますわいな、本所までは些少の道

遲ふならぬ内、すぐ歸つて來るはやに、早う手紙を』、妻が身繕ふ間に、小三はさら〳〵と書終りて、卷封しつゝ、おもはず落す一滴、やれ見られてはと、そッと押拭ふて、しかと手渡しながら、門口まで送り出で、『夜道ぢやに、氣をつけてゆきやれ』、何とやら澁まれ胸願ぎに、妻は背後を見返りながら、戀ならなくに急ぎ足、川風寒く千鳥鳴く隅田の堤を一散に走りぬ、小樓きりゝと引上げて、

妻の靜江を出しやりし後、小三は都かに佛前に坐し、唱名の聲もなく、毎度には似ぬ嚴かに、暫らくは立も得やらず、手向けたる寒椿、風なきに落ちて、ぱさりと座に散り敷きたる

に驚き、見上げたる小三が顔には、淋しき笑の見ねたりしがやをら立上りて納戸の中より取出す秘蔵の一刀、長らく腰を離しつる、この日ごろ、覺ねの業物さぞや喞ちつらむ、いざや久々の御見に入らばやといひたげに、鞘を拂ふてヂッと見詰め、再び鞘に納めて腰に手挾み、何か心に首肯きて、行灯の火を掻き立て、さら〳〵と書終りし一通、傍にさし置きて今は思ひ置くことなしとばかり、立出でむとする出合がしら戸を引明くるもあら〳〵しく飛込むだるは不動の三次、『お親分、大事が起つたぞ』、呼びかくる聲も息せき、たゞならぬ血相、小三聞くより、『だ、大事とは何事、平生にない周章てやう、ゐゝ、氣を靜めて話さむかい』、いはれて三次、水瓶の水ぐッと呑干しながら、やう〳〵心ゆ鎮まりけむ、

『オヽ、親分か、毎時と違つて今夜の大事、おちついてゐる

ところぢやないぞ、まア聞きなせい、船越様が亡くなつてから、那魔抑ひでもしたやうに威張りくさるは、彼の鳴神組、林はじめ乾兒の奴等、この廣い江戸を自分ばかりの天下のやうな顔して、見てもねられぬ亂暴狼藉、私や腹が立つて堪らねエが、肝腎の親分は、いつもにねエ引込み思案、何をいふても知らぬ顔でござるので、此方も我慢に我慢をしたが、今夜といふ今夜は、默つちやアねられますめエせ、事といふのは外でもねエ、今夜家の奴五六人と一緒に繰込だ大門口、例の厄病神の鳴神組の奴等、額親分の身内と知つてか、知らずか、何でもなきに喧嘩を吹かけ、聞てゐられぬ惡口雜言、私ちア逸る乾兒を鎭め、正月早々血を見るも穩やかでねエと當り障らず引上ると、好い氣になつて附上り、なはも執念さ無法の振舞、乾兒の奴輩は、いくら押へても、勘忍しきれず、

とうく喧嘩となりやしたわ、私しァ後も氣にかゝるが、外の時でもねェ、親分の勤慢中一つ足飛に注進に來やしたが、して親分の覺悟の程、何とで御座んす、早く聞しておくんなせ、エていふ内も心が急く、決心しておくんなせェ、以前の程より默然と聞きぬたる小三、この時憤然として、「よし、その喧嘩、俺も出る、して其中に林内記は居るか」、これは又た近ころ以て思ひ設けぬ小三の言葉、さてはむかしの淚然たる意氣に返りしかと、不動の三次躍り上つて勇み立ちぬ、「親分がその決心なら、私しはじめ乾兒まで、どんなに氣が勇むか知れやあしねェ、いかにも内記は居るどころか、この喧嘩の張本人」「それ聞て安堵、實は三次、手前がそんなにいはずとも、今夜は我から打入つて當の敵の林奴を、美事討取る乃公のつもり、靜江も先刻離緣して實家に歸してしまつたからにやァ、

誰に遠慮もねェ、この腕の樹く限りは吉原に屍の山を築てくれるわ」、いふや否、ひらりと土間に飛下りつゝ、「三次、樹けッ」疾風の如く駈出しぬ、

其十八

何とやらむ心にかゝる瓦人の樣子、仔細ぞあらむ、この手紙兄に見せなば事は分ると、他目も振らぬ小走りに、はやくも兄の宅に到りつけば、家の中には朋輩の誰彼、朝より來りて祝ひの酒にいづれも醉臥して、前後もわかぬ兄の体、二度三

度揺動かしても起きるけしきもあらざるに、ねゝ、人の氣も知らいで、呑氣さうなこの宵寢、『こゝれ、兄さんね、兄さんね、急用でござんすぞね』、呼起されて漸く目を覺したる綾瀬川、妹と見るより訝かりながら起直り、『汝や、靜江ぢやないか、何か用でもあつて來たのか、靜江は忙はしく懷中せし小三が書狀さし出しつゝ、『何の用かは知らぬけれど何でも今夜の中に、この手紙を兄さんに持てゆけと、わさ〳〵出ては來たが、此頃からの家の人の變つた樣子、どう考へても腑に落ちず、それに途々の胸騒ぎ、何か譯のある手紙、早う明て見て讀で下され』『はて、何事が起つたやら、用のあるべき心當りもないが』、いひつゝ開く封の中より、ばらりと落つる一札は、こはそもいかに、靜江に宛てし離緣狀、あまりの事に兄妹は顏見合し

て言葉も出 です、呆れ果てゝぬたりしが、やう〳〵にして、靜江は涙の下に、『ねゝこれ見た事かいな、氣にかゝつたも道理、さら〳〵何の落度をした覺にもないに、唐突にこの離緣狀、妾や厭おや、何でおめ〳〵この離緣狀受取らうぞね、はやう兄さん往て下され、往て詫して下さんせ』、おろ〳〵聲に兄にせがめば、綾瀬は腕を拱いて思案の体、靜江は一人氣をいらち、『これ、兄さんとした事が、考へる事も、いらぬではないかいナア、ちやッと往て、その譯聞て來て下され、それにしても餘りといへば、無情いは家の人、妾には一言の譯もいはいで、欺して家を追出すとは、男らしうもない仕打、これ兄さん、早う不承をいふて來て下さんせ』、ことわりせめる女の情、綾瀬はなほも考へに沈みしが、やがて組みたる腕を解き、『これ妹、汝や、出懸の樣子、何にも訝しいと思ふ

た事はないか、親分に限つて譯もなく女房を追出す人でない
これには深い仔細がなうては叶はぬ、もしや萬一」、いひさし
て妹の顔、今更ら見れば不憫の至り、よし、よし、兎にも角
にも、これから他と一緒に家へ出懸けて見やう、逢ふて話せ
ば思ひの外早く話がわかるも知れぬ、どりや鳥渡往つてこう
かな」、
やがて兄妹、向島さして急ぎ足、來かゝる門口、人のゐるけ
しきもなく、明放したる戸に燃火の光も漏れず、兄妹はいと
ゞ怪しみながら、靜江は勝手知つたる我家の内、消ゑし行灯
に早く火を燭せば、綾瀬は囚邊を見廻して、フト目に入りし
傍への一通、手に取りあげて讀むや否、「やゝッ、失策た、靜
江、たつた一足おくれたわ」、いひも敢ねず、駈け出る兄に、
樣子尋ねむ遑なく、靜江も共に後るまじと、いつくまでも追

ひ往きぬ、

往さ來るさの人足、この大門の開けしより絶えたる事なく、
曉の風は粉膩の香を送りて、見かへり柳の靡き定まらず、大
江戸の夜の賑ひは、こゝに集まりて、草木の眠るといふ丑滿
も、この廓ばかりは夜を昼なる三味の音、太鼓の音、不景氣
の風は何處を吹くぞと、吹かす烟草の烟の末にも知られぬが
習ひなり、
何事ぞ、この不夜城の別天地に、たゞならぬ物音、叫び聲、
どつと一雪崩うつて素見ぞめきの幾群周章まどひて大門口を
出去りし後は、大門はたと鎖して天女拜まむ雲の通ひ路、て

ゝに途絶ねたる奇代の出來事、大門口に立樂ふ見物が、口々に叫く取沙汰聞けば、鳴神組と額の乾兒が、生命を取りやるとの吉原を修羅場にして、背中合せの松飾りに血汐の雨を降りかけんず前代未聞の椿事とぞ聞ねし、

『ゑゝ、退た、退た』雷の落ちかゝるごとき勢ひにて、見物の中おしわけつゝ韋駄天の如く駈けつけたるは額の小三、つゝいて不動の三次、今宵が晴なる勝負の運さだめ、凛然たる威風四邊を拂ひて、美事の武者ぶり、見物は又もやゝよみを迷つて大門口に押よせたり、

其十九

鎖されたる大門に、額の小三は暫し猶豫ひつゝ、不動の三次と顔見合せしが、三次はやがて心得て門の扉をつゝけうち、開けよ、開けよと呼ばれど、開くるけしきも見ねざるに、小三は氣をいらち、身をおどらすよと見ねたるが、早くも大門の上に攀登りて、きッと下をば瞰しつゝ四方にひゝく大音聲

『やァ遠からむものは音にも聞け、額の小三が最後の死花、傲慢無禮の鳴神組、たとひ何この吉原に咲かしてくるゝも、

百人あらうとも、この小三が手の中に一人も近ずす事ではない、その他のものは邪魔立すな、怪我して後で後悔するなッ」、いふより早く飛下れば、三次も続いて内へ飛入り、制せんとするを突排ひ、喧嘩の場へ駈付たり、

素破や喧嘩と聞付るや、いづくともなく馳せ集まり小三が乾兒の十五六人、中に取り籠めて、鳴神組は林内記が指圖の下に、いづれも必死に切結べど、命がけなる敵手の鋭さに、一度は負色立て見ねたるが、多勢を頼みに鳴神組、四方より取圍むで際間なく斬かゝる、怪我人さへも多く出で、すでに危く見ねし折から、後の方に聲ありて、「めづらしや、林内記

性懲りもなく無用の腕立、額の小三が手並を知らぬか、知らぬとあらば相手せう、片端から蒐つて氷いッ」、いふより早く割つて入りしは、見紛ふべくもあらぬ額の小三、林を始め、配下のもの、いづれも小三と聞くや否、いひ合さねどたぢと二足三足、引退きしが、小三たゞ一人と見るや、林は擬勢をつくりて厲ますにぞ、「もう、かうなつては百年目、まづ小三より片付けよッ」、

むら〳〵と競ひかゝるを事ともせず、二人、三人斬り倒す、

傍りがたき小三の太刀風、誰れ向はむといふものなく、後込む背後に不動の三次、待受けしぞと名乗りかけつゝ切り入れば、こは叶はじと大門口に近れ出でむとする者共、それには更らに目もくれず、目さす仇敵は林内記と、小三は獅子奮迅の勢ひにて、内記目がけて飛びかゝる勇氣のはぢに、林は今

更ら卑怯の弱腰、そのまゝ逃出さむとするを、壓みかけつゝ逃しもやらず、『やア、卑怯ものめッ、今となつて逃げやうとて、大門は疾くに閉ぢあるぞ、武士ならば侍らしい尋常の勝負をせよ、逃ぐとても、おのれ逃すべきか』、いはれて流石に踏といまり、太刀を翳して身構へながら、かくても口のみは一廉の勇士、『やあ、素町人の分際で、武士に向つて手向ひせうとは身の程しらぬ不埒な奴め、もうこの上は容赦はせぬ、余が一命を取つてくるゝわ』、小三カラ〳〵と打笑ひながら、『はゝゝ、よくぞ言ひし、上野の山でも取るべき命を、今まで助け置たる恩を忘れ、今となつて其廣言、いざや額の小三が刀の利味、試みよ』、

おッとおめいて切りかゝる内記が太刀先、かろく受流して、無念重なる小三が冴えたる腕に、精氣こもりて電光石火と打込むを、内記も必死と防ぎしがいかで小三の劇しき太刀風に敵すべき、大喝一聲、切下ろす最後の一刀、あはや内記受損じて肩先ふかく切下げられ、その場に堂と倒るゝを、起しも立てず、のし懸りて止めを刺しぬ、

折しも馳來りし不動の三次、『お、親分、これで日ごろの思ひも晴れた、もう此上は長居は無用、片時も早く落ちなせエ、私や一足跡に殘り、乾兒の奴等を撫めてゆく』、小三は靜かに一刀鞘に納め、『どうで人をあやめたからは、活て居られぬこの小三、さりながら今一つの用事、それ濟むまでの命が入用跡は何分、頼むだぞ』、三次は意氣決然、『オ、親分、心配なせエますな、萬事はこの三次が引受けて』、

小三が姿、水道尻より隱れし一足ちがひ、押よせし捕吏の役人、三次一人を取圍みて逃さじものと心を配れば、三次もと

より覺悟の胸、悠々として願ぐ色なく、『喧嘩の本人は、私ちで御せェやす、尋常にお縄を受けまする覺悟、お手向ひはさら〳〵以て仕まつりませぬ』、

松の梢に吼ねし木枯の風も、深けては靜けき、こゝ三田の行冥寺の境内、霜をふむ足音しと〳〵と聞ねしが、立あらはるゝ一人の人影、四方を窺ひつゝ、裏手の墓地に忍び入りぬ、夜は殊さら物凄き墓地の奥深く、探り入りたる人影は、只ある墓前に跪きて、暫らくは默然として、言葉もなしに差うつむきしが、漸うにして首を擡げ、活たる人にものいふ如く、『この數ならぬ小三めを、人と思して御生前の御恩の段々、御恩

がねしの仕らぬに、林めに陷ぬれられて、無念の御最後、それも、これも、元はといへば、この小三から、何と御詫を申さうやら、此身の立つ瀬も御座らぬ仕誼、御怨敵の林奴は今宵首尾よく打果しましたが、せめてもの御念晴し、草葉の陰の御靈、小三が寸志を御嘉納くだされ、委細の樣子は押付け冥土で、お話し申すで御座りませう』、

いひ終つて諸肌ぬぎ、刀の鞘を拂つて袂にしかと握り持ち、南無佛の唱名、横腹ふかく突立てむとする一刹那、まろぶが如く馳せ寄るや双の手に取縋りて

『う、恨みぢやぞね』あとは得いはず、伏沈む、思ひがけなき靜江の姿、『やッ、汝や靜江、一度去つたる女房、なぜ未練な止立するぞ、死後れては一生の恥辱、ねゝ、そこ放せ、放せといふに放さぬか、ねゝ、いひ甲斐なき未練ものめが』、口

に叱れど心には合點のゆかぬ妻が上、人目しのびて來れる此處を、そも〳〵如何にして了りしなと、事の意外に思はず手の緩みしを、靜江はホッと安心の胸、『去つた女房といはんしても、妾しや一向しらぬこと、妾に連類かけまいとの離別とは知れたれど、それは餘りに水臭い、何といはんしても腹切る事は思ひ切つて、今、死なんしては卑怯ぢや、三次さんは今の先、罪を背負つて名乘つて出たと人の咄し』『ねゝやッ』

其二十

さゝんさの松風、曉の寢覺わびしく、夕暮の涙の音、もの哀れにして、一年の花紅葉は浮世の眺望となか〳〵に無きを喜こび、相州は田村の片畔りに、小やかなる庵むすびて都會の生涯、俗塵をさッと脱れしものか、惜しや自慢の大撥髮、でなと剃りこぼちて、誰が目にも殊勝なる法師姿、これが昔は大江戸に俠骨を賣りし名物男、額の小三が成果の末とは、されば四十の半生、夢と悟りては、今はた何に悲しみ、何に泣かむ、眞如の窓に障る雲もなく、身も心も菅々しく、此てろにも猶かもひ出さるゝは十左が哀れなる生害、不動の三次〳〵が美事の最期、一人死後れたる此身一つを持餘して、惜しう

もなき残年を送る情けなさ、せめては佛の前に亡き人々の冥福を祈りて、現世の罪業を消さむと思ひ出したるやうな看經に、強て心を慰さむる折々もあり、

おもへば幸か、不幸か、不動の三次が親分思ひの一心、何事も身に引受て名乗て出たる殊勝の覺悟、笑つて獄門の露と消ねつ、小三は又しても死なれぬ命の遣どころなさに無情を悟る彼發心、この田村に引越してより四年、あゝ、妻子珍寶及び王位、臨命終時不隨者と悟り果てゝは、江戸なる綾瀬、妻なりし御江が訪ひ來るをさへ許さず、たゞ松の風、涙の音を朝夕の友とせし額の小三、

浮世の萬事、一切さらりと埒明けて、光風霽月、こゝろに一点の塵だに留めぬ小三、さても長かりける假寢の夢の末期を今日と觀じて、その夕暮より佛前に跌座したるまゝ、枯木の如く動かざること一月有半、さらに一粒の米、一椀の水さへ口に入れず、たゞ專念の讀經次第に衰へて、眠るが如く大往生を遂げぬ、あれまでの英魂としなへに士風の墮落を怨ひで更らに浮ばざるべしとぞ傳へられぬ、松風蘿月、いつとても秋の悲哀を告げて、何とやらむ一際なつかしき小三が住捨しての無住の菴に、いつとなく色香も褪めぬ、美くしの尼、

来り住みて、こゝに看經の餘を紹たさりしといふ、そもや何人の成果なりけむ、（この所餘書あり）

しぐれ笠

《をはり》

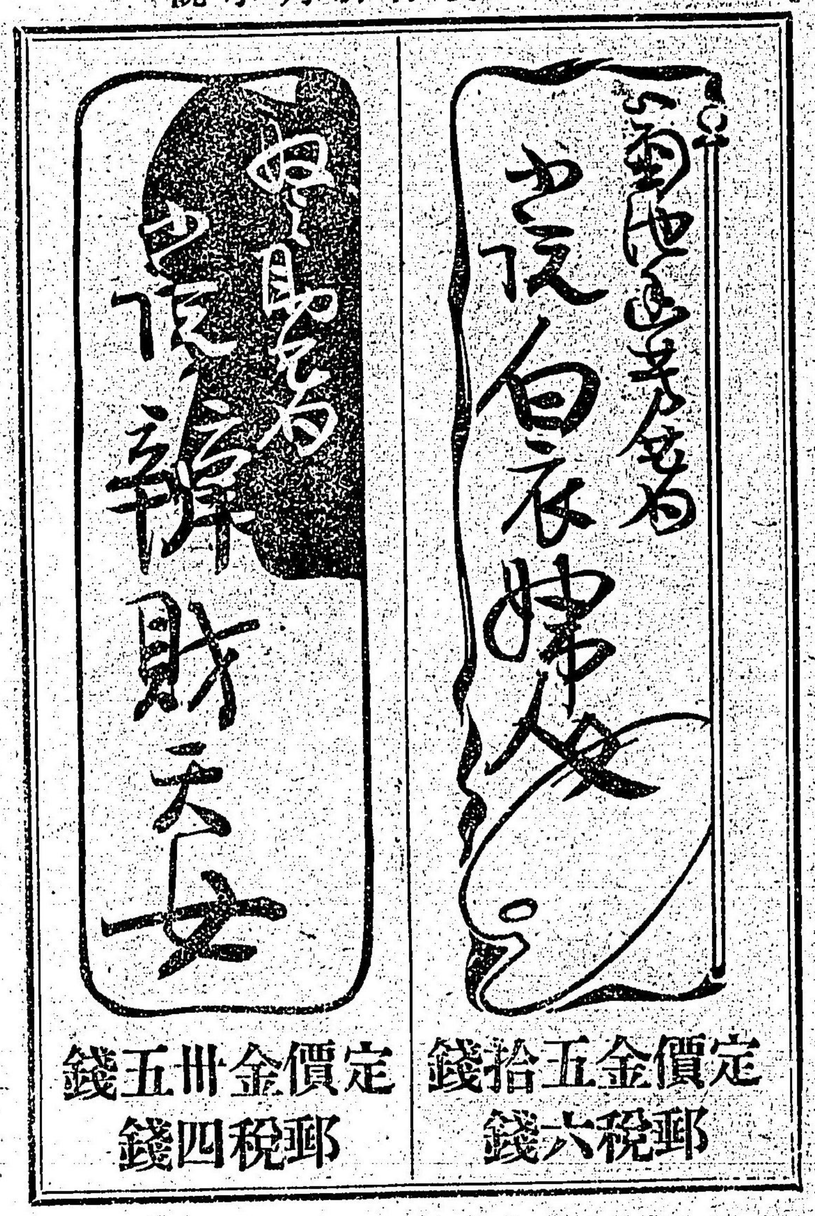
小說 しぐれ笠
定價金四拾錢

明治卅五年三月十一日印刷
明治卅五年三月十五日發行

著作者　村上信　大阪市南區末吉橋通四丁目八十六番邸
發行者　大淵渉　大阪市南區東濠水町三百十一番邸
印刷者　吉村源次郎　大阪市南區安堂寺町二丁目二十六番邸
印刷所　山田活版所　大阪市南區心齋橋北詰八十六番邸
發行所　駸々堂　（電話東千〇七十一番）

著作權所有

駸々堂發行新刊小說



一月一日發行新刊小說

駿々堂發行新刊小說

一月一日發行 新刊小說

定價金四十錢
郵稅四錢

定價金四十錢
郵稅四錢

!! 御待兼の家庭の栞第參編發行 !!

あきしく編

家庭の栞 第三編

▲定價金參拾五錢
▲府外郵稅六錢

記載目錄

一家言の部 ▲婦人の愛▲社會改良と家庭▲大阪人の家庭▲家庭の紊亂▲紳士の休而▲趣味の墮落▲避暑客に告ぐ

育兒の部 ▲母親の▲育兒數則▲腦膜炎▲赤兒の頭腦▲齒の發生期の注意▲赤兒の顏▲小兒の手▲赤兒の眠▲小兒と炬燵▲乳を呑すに適する位置▲火傷の用意▲小兒哺乳に就て(小兒科醫龜山忠良氏の談)▲腦膜炎の話(同氏の談)▲天然發熱法▲人口發熱法▲小兒と卵氣婦人の乳(小兒科醫龜山忠良氏の談)▲不トラホームの話▲雛詰の話(藥劑師清水如水氏の談)▲簡單なる肺の强壯法▲

衛生の部 ▲衛生問答數則▲化粧と衛生▲年を取ると皺の寄る譯▲健全な炬燵▲注意三ッ四ッ▲皺を寄るを防ぐ法▲容貌美醜自在法▲器量の悪きは母親の▲いつまでも年を取らぬ法▲容貌美醜自在法(水野寅吉氏の談)▲甲水揚法(第一番候に關する注意)▲

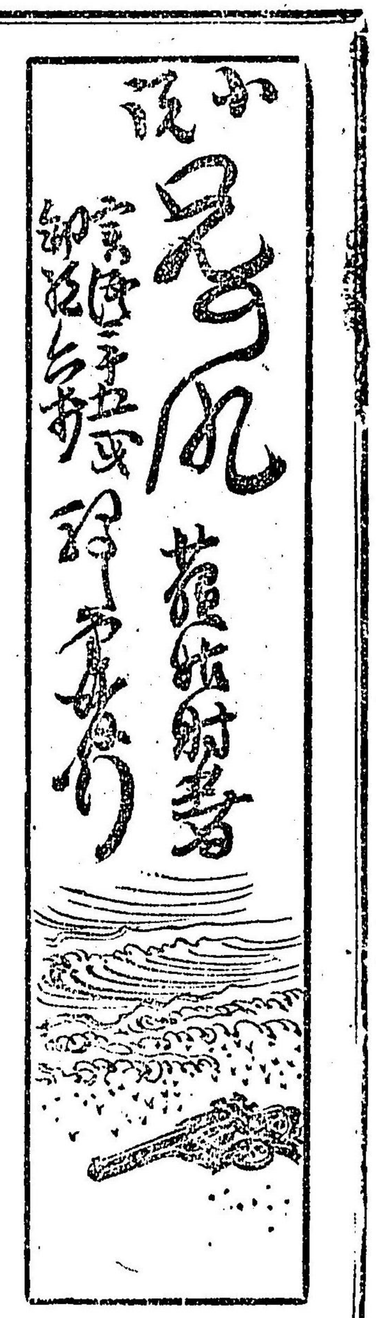
活花の部 ▲水野流挿花自在法(水野寅吉氏の談)▲日々

衣服の部 ▲大阪の嫁入お荷物しらべ▲五荷の御荷物▲小袖箱笥

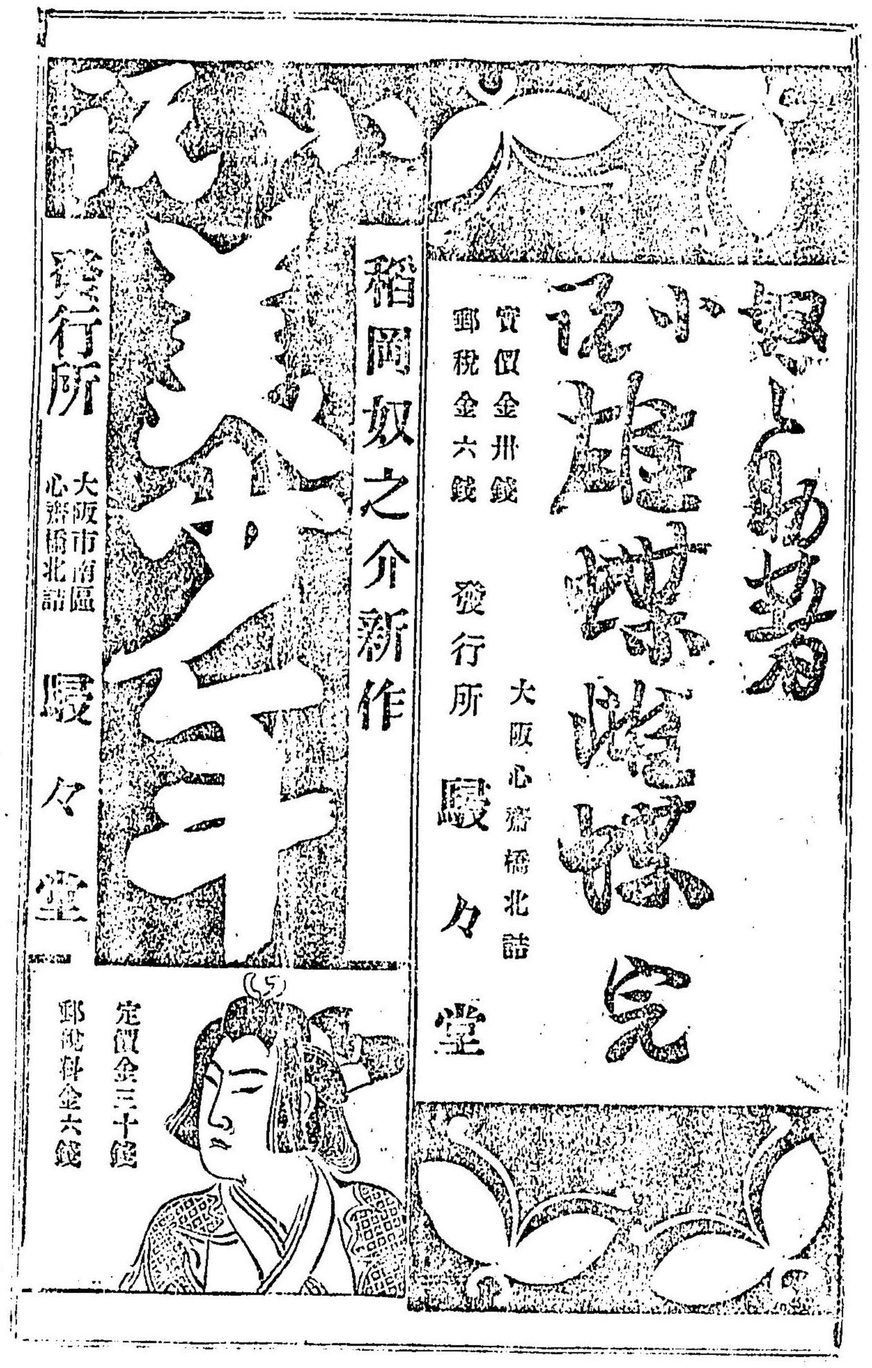
料理の部 ▲第三水壓力▲第三補遺劑「藥品扱法」▲乙一般取扱法▲丙一般取扱法▲丁一般取扱法▲戊一般取扱法▲己一般取扱法▲庚一般取扱法▲辛一般取扱法▲壬一般取扱法▲癸一般取扱法▲子一般取扱法▲丑一般取扱法▲寅一般取扱法▲卯一般取扱法▲辰一般取扱法▲巳一般取扱法▲午一般取扱法▲未一般取扱法▲申一般取扱法▲酉一般取扱法▲戌一般取扱法▲亥一般取扱法▲子一般取扱法▲丑一般取扱法▲寅一般取扱法▲卯一般取扱法▲辰一般取扱法▲巳一般取扱法▲午一般取扱法▲未一般取扱法▲申一般取扱法▲酉一般取扱法▲戌一般取扱法▲亥一般取扱法

第一編第二編共品切れ中の處何れも製本出來候間併せて廣告候也

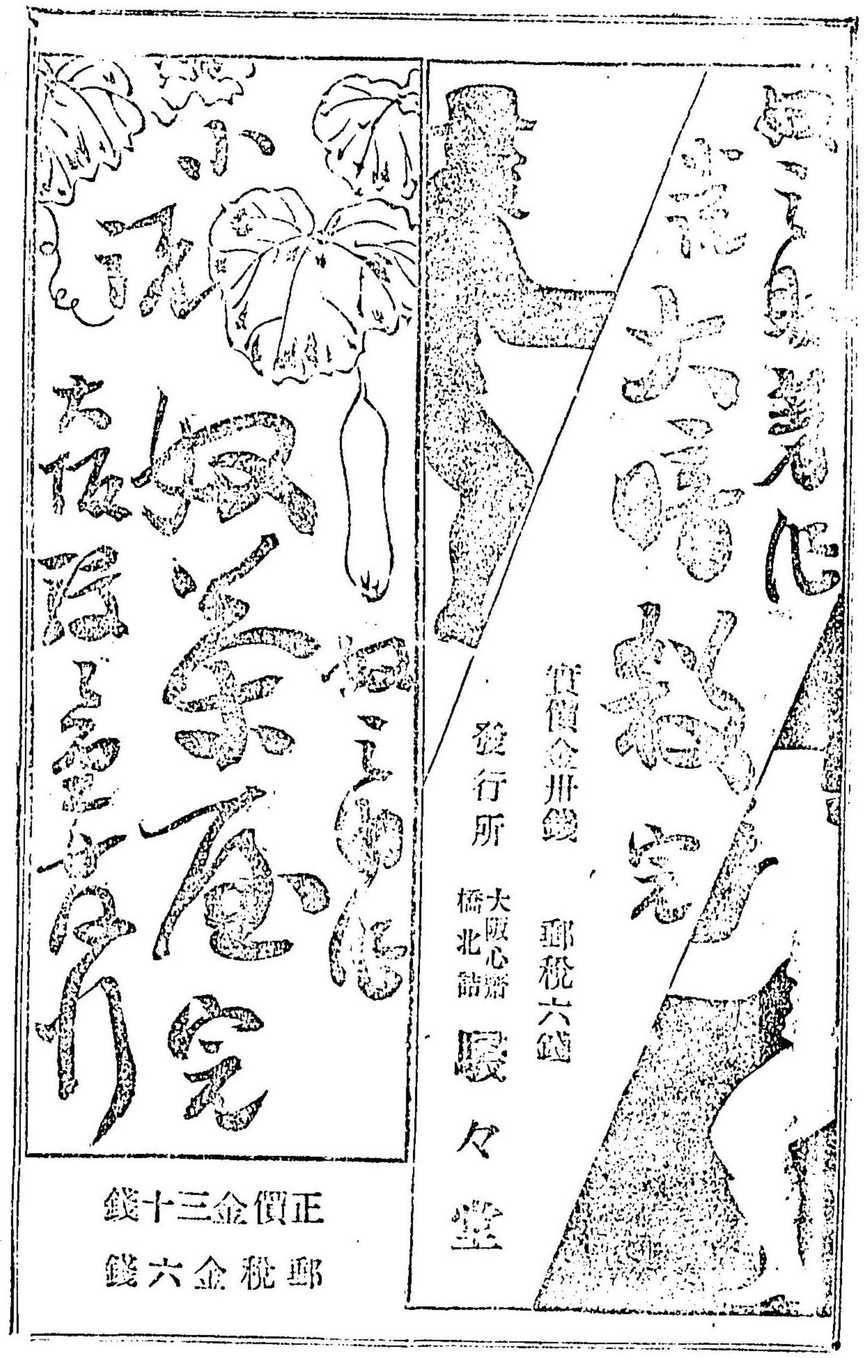
發行所 大阪心齋橋北詰 電話東千〇七拾壹番 駸々堂

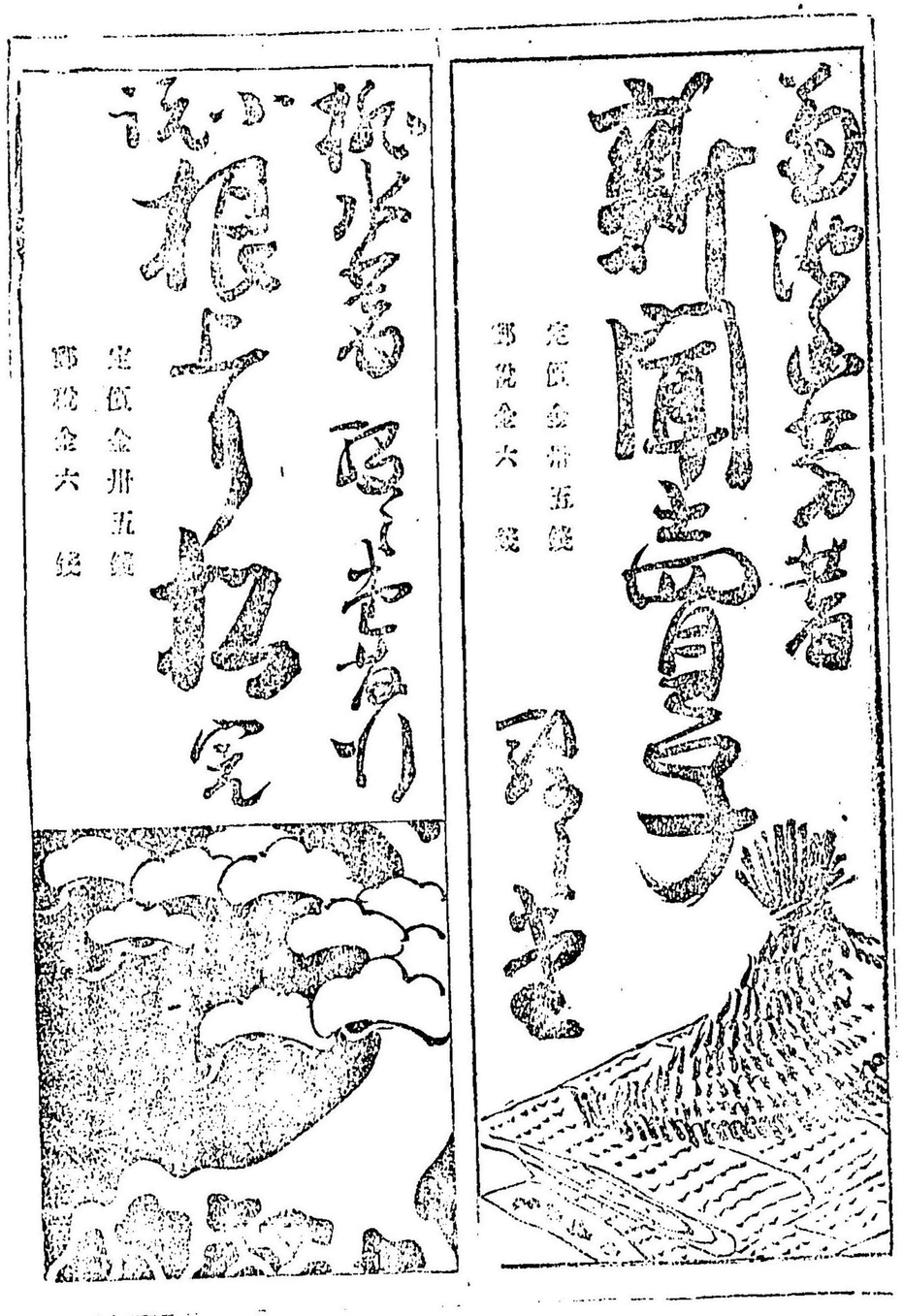


定價金四拾錢　郵税金六錢
東京　八尾堂發行


稲岡奴之介新作
定價金三十錢
郵税料金六錢
發行所 大阪市南區心齋橋北詰 駸々堂
實價金卅錢
郵税金六錢
發行所 大阪心齋橋北詰 駸々堂

實價金三十錢
郵税金六錢
大阪心齋橋北詰 駸々堂發行


定價金卅錢
郵稅六錢
發行所
大阪心齋橋北詰
暖々堂
正價金三十錢
郵稅金六錢


定價金卅五錢
郵稅金六錢
定價金卅五錢
郵稅金六錢

毎月一回定日發行

毎號讀切探偵雜誌

探偵文庫

探偵文庫は斬新奇絶なる材料を撰むで、名家獨得の筆を以て綴られしもの、一たび卷を繙けば千奇万怪、山あるかと思へば海嶺はり、善人善ならずして、惡人惡ならず、變幻出沒、殆んど讀者が豫想の外に出づ、而して文辞の悽麗なる、亦坊間に散在する他の此にあらず、讀者若し凄快なる探偵味を味はんと欲せば、去つて文庫を見よ

体裁

表紙は美術、石版、寫眞版、て新奇意匠を凝せーもの、口絵は當代第一流の畫家の筆になる極彩色の木版摺にて、挿版頗る美本なり、紙數は二百三十頁なり

定價

一冊　金貳拾五錢
拾冊前金貳圓卅錢
廿冊前金四圓半錢
郵送料壹冊金六錢

目次

第一編　龍夜叉阿仙
第二編　監獄破
第三編　華族の變死
第四編　暗穴地獄
第五編　惨殺事件
第六編　西洋幽靈奇談
第七編　晒し首
第八編　妾の魂膽
第九編　秘密電報
第十編　盤若之面
第十一編　滝車強盜
第十二編　鐘山の魔王
第十三編　可憐のお園
第十四編　數罪の探偵
第十五編　伊吹峠
第十六編　二人探訪
第十七編　夜叉娘
第十八編　二人幽靈
第十九編　毒婦お花
第二十編　古茶箱

發行所　大阪心齋橋北詰　電話東千〇七十一番　駸々堂

毎集讀切雜誌

探偵小說

菊版頒美本

一冊定價金八錢

郵稅金貳錢宛

拾貳部前金壹八拾四錢

淀川の水淀み無く日夜に流れ、昨日の潮は今日の潮と、變る世の中に、僅ならぬは小說の種、男女の痴情に非ざれも、環境海嘯の好計邪策、様に依て苦闘を重ね千篇一律、其名と向、男女の痴情に非ざれも、環境海嘯の好計邪策、様に依て苦闘を重ね千篇一律、其名と
る探偵の流儀を見れ、筋はかはらぬ浪花の產、其根を洗ひ葉を剪て新たに芽を吐く一趣向、
他に類の無い探偵小說、奇想妙案面出見次、午睡の伽に旅行の伴、内外觀はれ耳寶品、紙
數は毎も百頁以上、代價は僅か銅貨八枚、之を買はには損、之を讀はは痴、

目次

第一集 鄙皮美人
第二集 鬼美人
第三集 かたき討
第四集 生剣
第五集 少將
第六集 殺事件
第七集 福富中佐
第八集 稻妻
第九集 大蛇美人
第十集 美人殺
第十一集 天刑木
第十二集 三筋の髮毛
第十三集 七人の檢殺
第十四集 念の指環
第十五集 六人の死殺
第十六集 土藏切斬江柴公
第十七集 な生首
第十八集 族みな人
第十九集 鬼人
第二十集 鬼人
第二十一集 錦自殺
第二十二集 情婦の目
第二十三集 蛇の牙
第二十四集 妖怪寺
第二十五集 幽靈船
第二十六集 風X光線
第二十七集 美人と短銃
第二十八集 地下鐵道の女賊
第二十九集 暗夜の犯罪
第三十集 火鬼
第三十一集 普通惡魔
第三十二集 保安條例の犯罪
第三十三集 指頭の肉
第三十四集 胸三寸
第三十五集 頑固の冤罪
第三十六集 旅役者
第三十七集 一軒家
第三十八集 倉庫の小刀
第三十九集 館の片袖
第四十集 月夜
第四十一集 活人劇
第四十二集 婦人の念力殺
第四十三集 醜形の者
第四十四集 露骨
第四十五集 自殺主義三人婦
第四十六集 甲山
第四十七集 六配
第四十八集 新聞
第四十九集 谷中の美人
第五十集 雪の
第五十一集 可憐娘

發行所 大阪市南區心齋橋北詰 電話東（番）一七〇一 駸々堂

毎月一回發行

菊版頒美本

毎集讀切雜誌

民法小說

全一冊・定價金八錢 郵稅金二錢

十部前金九十五錢（郵稅共）

第一集 離婚の訴訟
第二集 後見の爭
第三集 小作の爭
第四集 親子の爭
第五集 連帶の紛議
第六集 兄弟の紛爭
第七集 保證の葛藤
第八集 主僕の爭訟
第九集 組合の爭論

法律は社會の秩序と吾人々生の權利とを保護するものなれど苟も社會に生息する人生は必ず之を知悉せざる可らず然れども由來法律なるものは複雜無味の學科なるを以て專門家に非ざる者は之を研究するに嫌厭たり駸々堂こゝに見る處あり民法小說なる一新書を編刊し事体を最も趣味ある小說に倣らへて法律の意義を實例的に解說せり若し夫れ本書を繙かば滋味津々たる小說中に於て不知不識の間に法律と人權の何たるかを解するを得て一舉兩得の利益有べし但本書は一冊に繫るを以て隨意例を一冊に繫るを以て隨意清讀の友さして無二の寶書たるを信ず諸公愛讀を賜へ

發行所 大阪市南區心齋橋北詰 駸々堂

毎月一回定期發行　講談雜誌

新百千鳥

東流の水、一たび逝いて復た返らず、塞翁の馬上、歳月徒に過ぎて、あはれ千古の英雄も、骨朽ちてはまた十塊と擇ばず、元より青史の傳ふるありと雖、万人の料に適せずとせば、名譽の講談師が見巻を叫いての時代物語、何ぞ一錢の價値なしとせんや、なぞゝ鹿爪らしく云ふにも當らず、本書は古往今來に於ける壯快悲絶の材料を撰むで、これを得意の舌頭に上せ、毎月一冊を期して版に上するもの、讀むで面白いかとはお問ひなさる丈が野暮なり、誇るとにはあらねど弊堂が苦心の新百千鳥、殊に製本の美麗にして御贈料として御贈物用として、無類の好冊子、僞言と思さば、買ッて見玉へ

各壹冊識切　菊版頗美製本
極彩色口畫　紙數二百五十頁

正價（一冊金　參　拾　錢
十冊前金　弐圓五拾錢
郵税　一冊　六　錢

目錄

第一編　大岡政談　菅野彌一郎
第二編　徳川十五代記上之卷
第三編　徳川十五代記中之卷
第四編　徳川十五代記下之卷
第五編　王政維新始末

發行所　大阪市南區心齋橋北詰
（電話東千〇七十一番）　駿々堂

大阪毎日新聞社
あきしく編

異聞奇話

瑣談片々

瑣談片々は文明國と野蠻國とを問はず東西洋と南北洋を論ぜず地輿に國をなせる世界各地の風俗習慣草木氣象禽獸虫魚凡そ天地人三才に渡れる森羅萬象の奇事異聞を網羅せるものなれば讀みて面白く語りて興あり之を繙かば不知不識の間に大いなる智識を得ると共に山の如き談話の種をその中より供給せらるべし

洋裝美本
金文字入
實價金卅錢
郵送料四錢

發行所　大阪心齋橋北詰八十六番地
駿々堂
（電話東一〇七一番）

93
185

大坂
毎日
新聞
社編

めさまし草

菊版半裁頗美製本

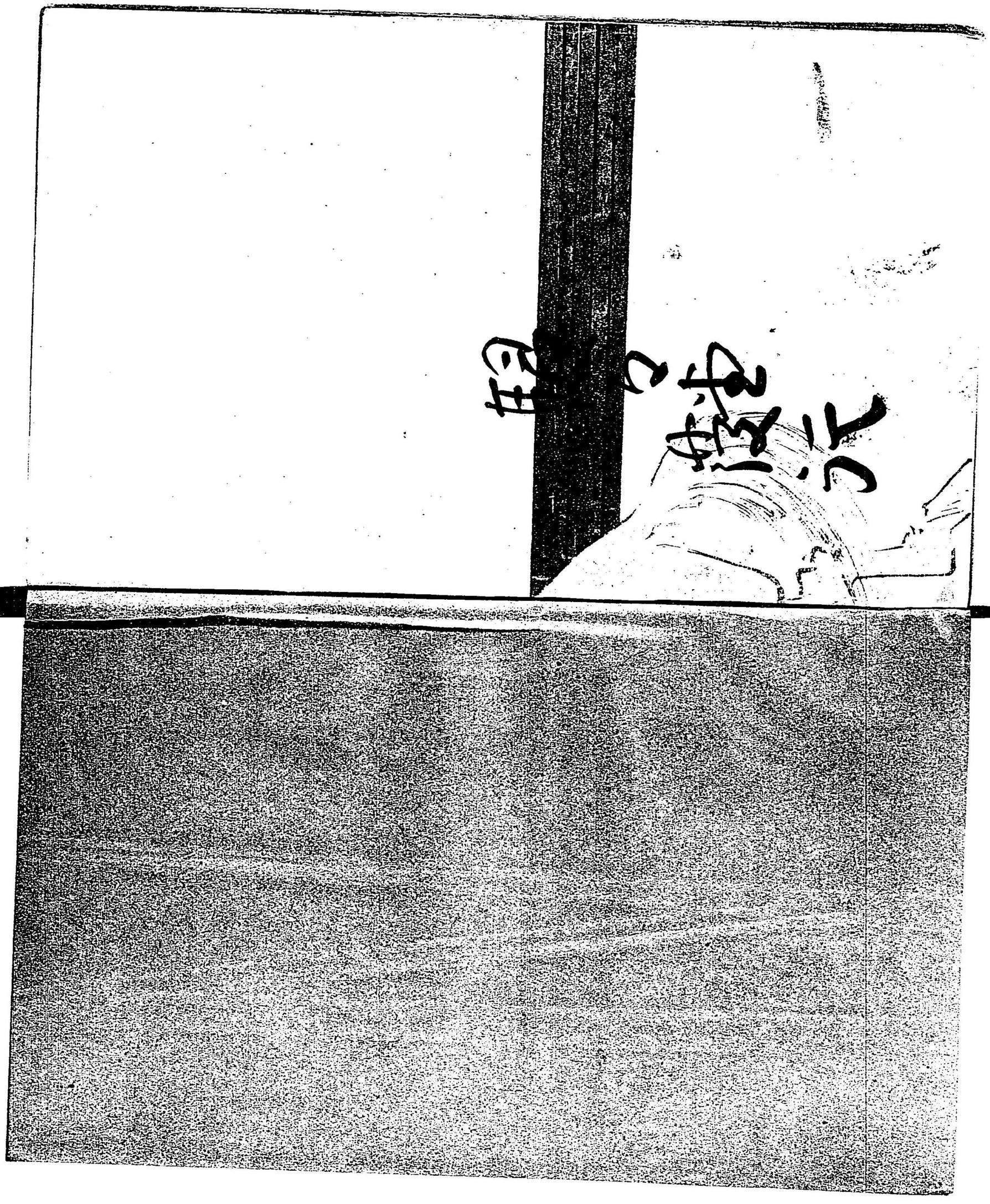
定價　金參拾錢
市外郵税　金四錢

遠車栗戯愛讀の諸君には
特別減價　金二十錢

本書は先頃大阪毎日新聞に連載して博く世上の好者に歡迎されためさまし草を名もそのまゝ茲に移し植たものです、新聞はその日〳〵に讀棄て顧みない傾きがあつて折角の名草もけんの一時の眺に過ないのは惜いからで、要するにその面影を何時までもとゞめ好者をしてその樂を永遠に保たしめたい愛心に出たものです、依て擅任記者に乞ふて冊子としました、これのみは本園に比して更に本書が聊か誇るに足ると思ひます、

發行所

大阪心齋橋北詰八十六番邸　駸々堂



63
185

11.2.15

93
185
Ⓜ

093915-000-9

93-185

時雨笠

村上　浪六／著

M35
DBQ-1350